
LOVE LETTER

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE LETTER

【コード】

N6209E

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

素直になれない男性と彼を想い続ける女性、幼なじみの高校生の恋模様を追った物語

第0話

瞬間、莉子の姿が野川の川道にあったように見えた。

凝らされていない無造作な髪に健康的なニンマリとした笑顔、掴まれてもすぐ振りほどけるぐらいに細い腕に跳ぶように軽やかにはねる細い足。

匠の瞬時的な景色の中に映されたキャンバスに、3年前の彼女のそのままがそこにあった。

「たくみっ！」

今にもそう呼ばれそうだった、洗心されたあの甘ったるい顔つきで。

だが、その名前を言われる前に莉子の姿はなくなる。後ろから吹いてきた北東風が彼女

ごとさらって行ってしまったように、匠のキャンバスにある制服姿の画は消されてしまった。

春を告げる風があの日のように莉子を自分のもとから奪っていく。

一面の緑地、そこを貫流していく野川、川を挟むように伸びていく紅葉の木々。いつも

のような、自然に彩られた景色が匠の前に広がっている。先まで見渡せる、永遠に続いていくような景色。

そこから莉子だけを奪われた、彼女にだけは永遠がないと言われるように。永遠を夢

見ることもさせてもらえず、その姿は匠の前からなくなる。

下を向いてるとハッと気づく、モノクロ写真のように止まってた

思考の世界からカラフ

ルな現実の世界へ引き戻される。

まただ、また莉子を幻想の中で映し出してしまった。

そんなことをしても、彼女が帰って来ないことは分かっている。

なのに、自分の身体の

片隅で莉子は未だに生きていて、こうしてたまに眼前に浮かんでき
てしまう。

その度に匠は後悔の念に駆られる、なぜ自分はもっと彼女に優しくしてやれなかったん

だろうと。思春期特有の羞恥心で素直になることができず、彼女の
前では突っ張ることし

かできなかった。

そんな匠に対して、莉子は素直だった。自分では中々手を出せな
いようなところまで、
気持ちを届けてくる。

今なら分かる、きっと彼女だったたまらなく恥ずかしかったんだ
ろう。けど、それ以上

の強い信念でもって、自分に体ごとあたってきてくれていたんだ。
瞬間瞬間で、今という

時をムダにしないように一生懸命に。自分の納得いかない人生なん
か過ごしたくない、い

つか君が言っていた言葉だった。

君はそのとおりに、ひたむきに北野莉子の人生に頑張った。

春風は暖かな空気とともに運んでくれ、匠をさするように抜けて
いく。足元に生えてる

草々も風に揺れ、彼の足をくすぐるようにする。同じように川道に
伸びてる木々も揺れて

いる、小歌をさえざるように。

暖かい日だった、これから訪れる季節を祝うように。

春は莉子の好きな季節だ、何かが始まるスタートの時で心が弾む。彼女自身も春にぴっ

たりな存在だった、明るく元気いっぱいな性格。

この時期が来ると、匠は莉子と過ごした思い出の場所を巡る。

その理由は、はっきりとは分からない。思い出を忘れないように、自分の背中を後押し

してもらおうように、彼女がまたそこにいるような気がして。

どれも正解なようで、明確ではない。理由は知らない、ここに来たかった、ただそれだけがいい。

ネットバンド型のストリート・ヘッドフォンを掛けると、匠はCDプレーヤーを再生する。

一音目から心に入り込んで打つピアノの音色。幾度と耳にしてきたのに、この伴奏が鳴るとスッと自我の世界に入ることが出来る。ヴァネッサ・カールトンの「サウザンド・マイルズ」、莉子が毎日のように聴いていた曲だ。この曲を聴くと最初の1フレーズだけで莉子の姿を思い浮かべることができる。

2人の思い出の曲に浸りながら、匠はカバンの中から封筒を取り出す。その1つ1つを開いては読んでいく、莉子から送られたいくつものラブレターを。

第0話（後書き）

7作目の小説です。全6話です。

第1話

気持ちのいい朝だった。春陽は匠の髪に光沢を与えて撫でていく。その上では、きつと

この家も屋根という頭を撫でてもらってるんだろつ。

さすり、さすり、こいつは気持ちいい。

穏やかな家、穏やかな自分、母親のお腹で温められてる子動物みたいだ。布団をかぶつ

ていた肩までも、朝陽をあびていた肩からも、抜群に彼を夢見心地にいざなっていく。

「た〜くみいっ!」

「たつちや〜んっ!」

窓越しでも莉子の思いきりの声はよく響く。暖壁を破る冷凍風、やかましい近所の騒音

のようないらないものだ。

匠は現実から逃れるように布団を頭までかぶる、こんな温和な環境から抜け出したくないと。

「たくみ、こら〜っ!」

「遅れるぞ、起きろ〜っ!」

この温もりを残しておきたい匠の現状なんて無視にと、莉子はその殻を破っては飛び込んでくる。

インターホンの連弾、玄関の乱蹴り、毎朝恒例の平尾匠と北野莉子の間接決闘。直接手

を加えることはなしに、嫌がらせに近いけたたましい音の数々でケリはつけられる。

5分12秒、今日はねばった方だが容赦なしの彼女の連続攻撃に平尾艦隊は沈没する。

やる気もないかまぼこ型の団子虫みたいに、ベッドから転げ落ちるには這うように起きる。

消えかけた自分の胸の内のロウソクにマッチで火をつけるよう、洗面所で顔を洗って存在

を取り戻す。見えてないほど閉じた目のまま、教科書と文房具を平つたいスクールバッグ

に押し込んでいく。適当に制服に着替える、見てくれなんて特に気にはしない。どれだけ

寝癖がボサボサついてようが、見られて困るようなこともないから関係ない。

2階から1階までの木板の階段、さすがにここだけは落ちないように目を開く。下りき

った途端、その目は再度30%機能になる。その30%すら、きちんと働いてるかとなれば疑問だ。

玄関で靴を履きながらアクビをかます。憂鬱、この一言につきる。

玄関扉を開くと勝者が「おはよう」と言って迎える、なんだか気高い雄叫びのような感

覚だったので返さなかった。弱者への余裕、苛々しさはないにしても好感は持てない。

「ったく、挨拶ぐらいできないのかなあ」

確実に相手に聞こえる独り言、言ってるだけなので言わせておけばいい。こんな置き言

葉、気にしていたら2人は傷跡だらけの全身になってるはずだ。

足代わりの自転車に乗っかり、ペダルを漕ぎ出すと莉子も匠に続く。

前を緩く走る匠、それを監視するように後ろを続走する莉子。競

馬場で見るような光景、

ジヨッキーを莉子として馬は匠。自分勝手に我が道を暴走しがちな馬を軌道修正するジヨ

ッキー。兄弟関係と表すのなら、面倒見のいい姉とわんぱくな弟と
いったところか。姉に

はそういう自覚があるが、弟にはそんなものは一切ない。むしろ、
自分が弟と知ったら「な

んで、俺が弟なんだよ！」と頑として認めないはずだ。それがまた
胸の内をくすぐったり

する、少々荒いぐらいの方が弟はかわいかったりするから。

シャ〜ツ、シャ〜ツ、2台の自転車が田園を裂くように伸びる一
本道を走りゆく。

ガチャツ、ガチャツ、2台の自転車の一定でないペダルの未定間
隔音。

春暖の陽の差し込む気候、それは1年で最も心地良い。野原で寝
転びながらぐっすり眠

りでもすれば、この上ない幸せに包まれることだろう。ただ如何せ
ん、平日の学生にはそ

の選択肢の執行は難しい。欠席で内申書がダウン、万が一にズル休
みがバレようものなら

タダじゃあすまない。そんなリスクを冒してまでの幸せじゃあない
だろう、天秤にかけれ

ば分かる。まあいいや、後で授業中にも眠ればいい。

チリリン、チリリン、陽光に表体温をもらっていると後ろのベル
が鳴る。発言権を求め

る拳手の代わり、「話があるんですけど」という言葉の代わり。こ
の行為は一方的であるこ

とが多い、匠の意思はなくとも莉子から言はなされる。

「たっちゃん、そんなペースじゃ遅れちゃうよっ！」

風の抵抗を受けながら届く声、あらかじめ大きめな発声にしてあ

るので単語一つ聞き逃

すことはない。それは分かっているのに匠から返答はない、それに莉子は顔をしかめる。

グツと足に力を入れると、一気に匠の左隣にまで自転車を並べる。自動車1台が走れる

ほどの道幅だ、自転車が2台も並ぶといっぱいいっぱいになる。前から自動車でも来よう

ものなら、さあ大変。自転車を降りて、なんとかスレスレで互いを傷つけずにスルーする。

調子に乗って行って脇の小川に突っ込んだこともある。車は我関せずとさっさと走り去っ

ていく、人は冷たいもんだと現実を知る瞬間だった。

横にきた莉子は不快そうな顔つきをして、匠を見やっている。

「聞いてんの!？」

「……………聞きたくないけど、声がでかいから聞こえてる」

しょうがなく発したという言葉と、うっとおしそうにする匠の態度。それが余計に莉子を苛立たせる、何様のつもりだとバロメーターが振れてくる。

「遅れるよ、いいの?」

「……………いいでしょ、別に」

顔も向けない素っ気ない匠に、莉子は息をつく。これまでに何度となくあつた同様のシ

ーンを思い浮かべ、またかと嫌になる。

「言っとくけどね、たっちゃんが遅れるから私まで遅刻するんだよ」

「たっちゃんの遅刻の回数がイコールで私の遅刻の回数になるの、分かってる?」

「さあ、俺バカだから分かんねえ」

適当な返事に、莉子が匠の背中にバシッと一発くれる。

痛つてえ、と自転車は一瞬よろめく。

「危ねえ、お前、何すんだよ」

「何がよ、いつも起こしてあげてる恩を仇で返すからでしょ」

「あぁっ？ 起こしてくれ、なんて一回も言ったことないだろうが」「言われてもないのに起こしてるのよ。まぁ、なんて良い子なんでしょう」

右隣へ当てつけのように、わざと大げさに言ってみせる。

そんなもん知らねえし、そう言いたげに匠は目元も口元もクツとしてみせてペダルを漕

ぐペースを上げていく。半ばやけくそで力を入れていく、眠気なんて最初からなかったぐ

らいに吹っ飛ばして。莉子も追いつこうとペースを上げるが、駄々っ子の弟はこんなとき

必要以上の根気を見せる。おもちゃを買ってもらえずに売り場で泣き散らす子供のように、

相手の予測をこえる行動をしたりするものだ。

「ねえ、ちよつと待ってよ！」

莉子の言葉は知らんふりで、2台の自転車の距離はみるみる広がっていく。

もっつ、恩知らずな匠に怒りを憶えながら、発散させるように力を込める。いゝだつ、

離れてく背中に顔を崩して届かない気持ちばかりの仕返しをしてみせた。

遠くに行かないでよ、あんまり開くと手が届かなくなっちゃうでしょ、そう心内も本音を

をこぼしていた。

「うつつす、うつつす、うつつす」

8時40分、なんとか1時限目には間に合った。

1年4組の教室に入ると、匠は回復したテンションで気軽に振る舞っていく。

教室はそれぞれのグループに分かれ、それぞれの話題で盛り上がっている。今日の朝刊のニュース、昨日のテレビ番組、今からの授業、などなど。その多くは内容の濃いものではない、ノリでなんとなく話してるものだ。高校1年生ならそんなものだろう、社会や未来についてなんて漠然としたビジョンしかない者がほとんどだし。彼らにはまだまだ青の時間を楽しむ余裕がある、後で嘆くくらいなら馬鹿がつくぐらい遊びほうけた方がいい。

「ういつ、おはようさん」

林部右太、彼の気の利いた江戸商人みtainな言葉回しは今日も健在だ。別に彼の先祖が江戸商人なわけではない、多分。家系図で系統を確かめたことはないけど、ここが関東じゃないという時点でおそらく違うだろう。流浪人、ヒッピー、説を考えれば可能性はあるにしろ、彼の感じからそれは窺えない。雰囲気はあるけれど、中味は案外男らしい。全国や世界を行脚するより、自分のいるべき場所で同志と鍋をかこむことを選ぶはずだ。まあ、歴史ものの小説やら時代劇やらを見て影響を受けたクチなのだろうけど。

「ういつ、おはようサマンサ」

「おっ、今日も好調ですな、おいさん」

バチンツ、特に意味合いはない片手ハイタッチをすると、匠と右太も他の例外ではない

ように昨日のバラエティ番組のことを話す。若手芸人のネタ番組で、誰がよかったかを言

い合い、そのネタを実践してみたりする。素人がやったところで面

白味は半減するに決ま
つてるが、2人はそれで爆笑できる。質は関係ない、そんなことは
本物にまかせればいい。
やつてるだけでいいんだ、それだけで面白いし、どれだけでも笑っ
ていられる。

えてして、青春なんてそんなものだ。大したことなんかしてなく
ても、大きなことをし
ているような錯覚に自分をはめこむことが出来てしまう。簡単だし、
単純だし、効率がい
い。奥は深いにして、青春時代の表面は得だ、難しいことなんかい
らない。

「バカだね、あれは」

待井一音は、匠と右太の姿を遠目に見ながら首をかしげる。なん
でまた、あんな内容の
かけらもないことで笑えるんだろうか。

高校に入ってから、よりいっそうバカに拍車がかかった。平尾匠
だ、あいつが右太を底
辺に引きずり下ろしたんだ。

おかげで着いてけないじゃない、そう一音は息をつく。

「おはよっ、一音」

「あっ、おはよう」

匠から3分遅れて莉子が教室に着く、彼女もギリギリセーフだっ
た。

「どうしたの？」

「あれだよ、見てみ」

そう一音は、遠くでぶざける匠と右太を指さす。

「うわあ、何やってんの、あれ」

「昨日のテレビのだよ、傍から見たら寒いのがかんないのかな」

「まあいいんじゃない、本人たちがそれでいいんなら」

言い捨てるようにして、莉子も口角を上げて首をかしげる。この

年代になると女子が男

子を精神年齢で上回ると言われるとおり、莉子と一音には匠と右太の底辺の行動は理解しきれなかった。

でも羨ましくもなる、あそこまでバカをやってみたいとも思う。

「あれっ、そういえば匠と一緒にじゃなかったの？」

「一緒だったよ、でも途中でぶつちぎられちゃった」

莉子は学校までの一連の流れを説明する。

「えっっ、ひどいことするね」

「まっただよ、私の恩は全然匠には伝わってないみたい」

「あああ、可哀相な莉子ちゃんだねっ」

そう一音は、莉子の髪をそつと撫でてあげる。女子は女子で悩みを共有し、それを知らずに男子は日々を送る。

1 時限目、春陽の誘いに負けて机に身を預けていた匠に、莉子はノートの1ページを切り離して丸めた紙ボールを投げ当てて仕返しをしておいた。

5 時限目、匠の瞳のフィルターに映る映像は脚線美の数多を追っていた。細い、ぷっくり、普通、却下、品定めをするように眺める。

おっ、良いのがあった・・・なんだ、一音かよ。

「ちよいちよい、おいさん、何してんの？」

不審な行動を見つけた右太は、すかさず団体から外れてくる。

「決まってるだろ、女子のブルマー姿をこの目に焼きつけておくんだよ」

やっぱりか、あまりに素直な行動に右太はため息をもらす。

体育の時間に体操着を家に忘れてきた匠は見学にまわり、特別することもないので校庭

の右半分をつかってキックベースをしている女子に目をつけた。左

半分では男子がサツカ

ーをしているが、そんなもの見ても何の得にもならない。

「ちなみに、あれをその目に焼きつけてどうするんですか？」

「今日あたり、どうかなって思って」

「マスですか、おいさん？」

「前が3日前だったから、そろそろイケるだろう」

「クラスメイトがおかずか、俺には無理かな」

「そういうんじゃないさ、あくまでブルマー姿の女子でってことだから」

「ほう。でっ、これってというのはありましたか？」

「どうかな、どれも太めだからねえ」

目に止まったのが一音だったことは伏せておく。

「いいじゃないですか、高校生はそれぐらいが健康的ってもんですよ」

「まあね、そりゃそうだ」

談笑しながら女子を見てみると、外野にいた一音が2人の視線に気づいた。キックベアー

スで女子の蹴る力では外野まで飛ぶことは少なく、暇にしていたせいで。

「そこっ、何を見てんの！」

「やべえ！」

一音の大声で、女子の視線が一樣に匠と右太の方へ向く。

授業の後で一音から注意が入るのかと思ったが、ここで思わぬ裏切りが入った。

「こいつ、お前のが太いつて言ってたぞ！」

一音は自分の足を見てから、右太の言葉を理解する。一気に彼女の顔色が変わる、こっす

いうことには人一倍は過敏に反応するタイプだから。

「たくみっつ！」

「右太、バカやろっつ！」

ダッツ、怒気に満ちた一音がダツシュしてきたため、匠は一目散に逃げる。男と女の脚力といえど、陸上部の一音に帰宅部の匠が敵うはずもない。巻き上げる砂埃の量が全てだ、無駄に多い匠と均一な一音。フォームが雑なせいで動きがいやに多い匠に対し、整ったフォームでブレのない一音。

校庭半周ほどで逃走劇はあっさり幕を閉じ、一音の平手が匠の頭を直撃した。

「お前、痛えなあ」

「叩かれるようなことしたからでしょ、天誅よ」

バチンツ、自陣に戻っていく一音は途中で内野の莉子とハイタッチを交わす。

ダツシュした上に殴られるなんて最悪だ。まだ、普通にサッカーしてた方がマシだった。

結果、この日の彼のマスは中止となるのであった。

夜、台所で夕食の支度をしているとインターホンの音が響く。独りきりでいる一軒家では、これが大層にホラー要素を兼ね備えたものを感じる。これを考え出すとキリがない、普通に生活してても誰かがいる気がするし、お風呂に入っても誰かが後ろにいる気がするし、寝てても誰かが隣にいる気がする。心底の怖がりには無理なしチュエーションだろう、匠もまああの該当者ではあるが。

こんな時間に誰だ、そう思いながら玄関扉を開くと莉子の姿があった。部活終わりだった。

たため、その肩にかかる髪は汗でいくらか濡れている。スクールバ

ツグは自転車に掛けた

ままで、ブラウスのポケットに手をつっこんで寒そうにしていた。

「おっす、変態くん」

「変態じゃねえつつうの」

昼間の体育の時間の一連のことを皮肉ったのだろう。止めてくれ、そんなあだ名でも付

けられたら一生の汚点だ。高校生活の間で蔑むように言われ続け、その後も同窓会の度にツッコミが入るに違いない。

クスクツク、そんな嫌そうな表情を浮かべる匠を莉子は愉快そうに笑う。彼はからかう

と面白い、性格とは逆にいやに素直にリアクションを見せてくれるから。

「何の用だよ？」

「別に、用はないけど」

「じゃ、帰れよ」

「なんでよ、用がないと来ちゃいけないの？」

「はい、こっちは忙しいんです」

なおざりに退けようとしても、莉子は食いさがる。この程度の退け、過去何度となく経験

してきてますからと言わんばかりに。

「良いニオイがするなあって思って、今日のメニューは何？」

「ウソつけ、まだ作り始めたばかりだよ」

ニオイが外まで充滿してるわけないだろ、そう匠は煙たげにする。バレたか、そう莉子はベロを少し出してみせる。

「ちょっとお招きにあずかろうと思って、いいでしょ？」

「やなこと、俺の分が無くなるだろ」

「多めに作ればいいじゃん、これから作るんでしょ」

「お前に食わせるメシなんか無い、いいから帰れ」

玄関扉を閉めたそうにして指図しようと、まだまだ莉子は食いさ

がる。そんなぐらいで

「ハイハイ、分かりました」と帰るような柔な心じゃ「ごいません、しつこく粘ってみせ
るんだからと。」

「いつも面倒みてあげてるでしょ、たっちゃん」

「みてくれなんてお願いしたことはごいません」

「ああ、そういうこというんだ、ふ〜ん」

莉子は何か隠し玉でもしてそんな不定な顔色を見せる。

「そんなふうと言っんなら、もうこれからはたっちゃんのお世話はしないからね」

「はいはい、どうぞ、ご勝手に」

ないがしろな返しに、莉子はキツと目元を上げる。

「知らないよ、これから遅刻したって！」

「遅刻？ 遅刻って何でしょう、ワタシ日本語トカ分カリマセ〜ン
ノデ」

「はあ？ もう信じられないバカですね、救いようがないわっ！」

「はいはい、失礼いたします」

バコツ、空返事で玄関扉を閉められ、頭にきた莉子は力いっぱい
に扉に蹴りを入れる。

自転車に手をかけると、地団駄を踏むように足を踏みつけながら帰
っていく。

なんだよ、手伝ってあげようと思ったのに。人の親切心を門前払
いするなんて、最低。

人通りのないことを確認して、沸騰しそうな怒りを自分の中でぶ
つけていく。前はあん

なじやなかったのに、自転車をひきながら口を尖らせて莉子は目を
細める。

夜空を見上げてみる、今日の月のように少し欠けたような心持ち
になった。

「俺のお世話はしねえんじゃねえの？」

2分24秒、莉子の勢いが結果に出たように平尾艦隊はあっさり沈没した。

昨日の感情が静まりきつてないのは、直視した瞳と少しムツと出た唇で分かりえる。

「うっさいな、起こしてあげてるんだから感謝しなさいよ」

「……なんなんだ、一体」

フンツ、煩わしそうに息をつくくと、匠は舌打ちをして自転車に乗っかる。ジョッキーの

ことなど知らないというように、馬は暴れん坊に走り出す。

「ちょっと、今の何よ!」

「たくみつ、待ちなさいよ!」

先をどンドン行く匠の自転車を追いかけて、莉子は怒り丸出しでペダルを漕いでいく。

昨日あんなふうに言われたのに、骨を折ってまで起こしに行つてあげたのに。あの性格

どうにかなんないのか、侵食するように体中がむかむかしてくる。

そうしてるうちに、目の前の自転車がなにやらスピードダウンしていく。何があつたんだろう、パンクか、体調不良か。

「どうしたの？」

「やべえ、英語のレポート忘れてきた」

「取りに帰るの？ 遅刻だよ」

「出さなかったら、放課後残って書かされるんだぜ。そっちの方がよっぽど嫌だろ」

そう言つて、匠は自転車を持ち上げて反転させると、学校と逆方向へ出発する。

ヒューッ、残された莉子は急にそれまでのむかむかが体から脱げていく、遠ざかる背中

を見つめながら。

人や車が小粒ほどにしか見えない、田園地帯に囲まれた中で独りにされると孤独感があつた。吹きつける風は寒さが残されていて、置き去りにされてしまったような感覚にも苛まれる。

ああ、匠はあるとき、こういう情感を受けたのかなと考える。しばらくは匠の後ろ姿をあてもなく眺める、彼もまた小粒になっていった。

昼休みを告げるチャイムが鳴ると、教室内の空気は一気に和らぐ。その前後で室内に何があつたわけではないのに、そこは公園の遊び場のようなレジャー空間になり、そこにいる人たちは張りが抜けて解放される。みんな園児みたいにギヤアギヤア騒ぐし、思い思いのことをして時間を過ごす。遠目から見れば、それは幼稚園でみる光景となんら変わりない。

匠は購買で買ったあんぱんとサンドイッチとコーヒー牛乳を食べる。

「おいさん、そんな質素なメニューで飽きないの？」

彼の昼ごはんは同じようなものしか並ばない、それを指摘する右太のお弁当は中々に張り切ったメニューが揃えられている。

「いいんだよ、飯なんて食えりゃあ。世界には食べたくても食べれない子供がごまんといるのに警沢言つもんじゃないよ」

と言いながら、右太のナゲットをいただく。

「うめえな、これ。ったくよお、不公平なもんだよ。料理のできる

母ちゃんがいると、ホント得だよな」

「まあな。ただ、こればかりは俺らに選択権はないわけだから、それを言われちゃおしまいだ、そう匠は息をつく。

彼の昼ごはんのおこずかいは300円、その中で自分なりにやりくりする。この日でい

えば、あんぱんは60円、サンドイッチは130円、コーヒー牛乳は70円。合計で260円、お釣りの40円は彼のもの。

その40円がささやかな幸せになる、ほんの微細といえるぐらいの。毎月のおこずかい

は別にもらってるが、40円といえど自分のものになれば嬉しいものだ。缶ジュースを飲

めるまでに3日、「安い・うまい・早い」の牛丼を食べるまでに10日もかかる。それでも

こんなに喜べるんだから、小銭と青春のありがたさを拝みたい。

「あの2人さあ、なんか対称的だよな」

一音が遠巻きにして見物しながら、匠と右太のことを言う。

「そう？ ずいぶん気が合ってるように見えるけど」

気が合ってるというか、同レベル。ここから見る光景は、入学当初から変化はみられない。

「片や母親の作るレパートリー豊富な上級弁当、片やパンとコーヒー牛乳。片や両親とも

仲良しの理想的な家庭、片や親とろくに顔も合わせない乾燥的な家庭。片や江戸商人みた

いな喋り方をする王子系、片や人の気持ちも顧みないひねくれ系。どこがどうなって、あ

の2人がコンビになるんだろう」

分からないわあ、そう一音は首をかしげる。

「それ、なんか右太のこと持ち上げすぎじゃないの？」

莉子は言葉の裏を読んで、フフーンと笑顔を見せる。

「ちっ、違うよ。バカなこと言わないでよ」

そう一音は横に顔を向ける、目を合わせてたら頬の色が変わってしまいそう。

ツンツン、莉子はヨーグルトを食べていたスプーンの柄で一音の頬を突ついてからかう。

「うりうり、うりうり〜っ」

「ちよっ、やめてよっ」

彼女は実に分かりやすい、それだけ純でかわいらしい。

それが羨ましい、自分も一音みたいに素直になりたい。そうなれたら、匠との関係も今

より柔らかくなっているんだろうな。自分がつんけんしてる分、彼にも無愛想な態度を取

らせてしまってる。自分の変化は彼の変化と近似、なら彼にいちいち腹を立ててるのはお

門違いなのかも。それは自分への憤りで、彼に思ってる感情はそのまま自分への思いなの

かもしれない。

莉子は鼻で大きく息をする。コンコン、自分の心扉をノックしてみた。

夜、台所で夕食の支度をしているとインターホンの音が響く。昨日

の今日だからなんと

なく予想がつく、そう思いながら玄関扉を開くとやはり莉子の姿があった。今日も部活終

わりだったため、その肩にかかる髪は汗でいくらか濡れている。

彼女は剣道で県下何位という強者らしい、同学年では一目おかれる存在だ。実際の試合

を見たことがないので、匠はそれがあまりピンとこないのだが。毎日の強気な彼女を浮か

べると想像は可能としても、競技となればまた違う話だろう。

「今日はどういった御用で？」

玄関扉は顔一つ分ほどしか開かれない、すぐに閉める気が満々といったように。

「ちよつとお招きにあずかるうと思って」

なんなんだ、昨日と同じ台詞で入れると思ってるのか。

第一、春に差し掛かるといっても、この時間はまだまだ冷える。

こんなところで言い合

うより、早く家に入って暖房の効いてるリビングに行きたい。

「お腹が減ってるの、なんか食べさせて」

子供がおねだりするように、澄んだ笑みをする。

「自分家に帰ればいいだろ、すぐなんだから」

「いいの、たまには匠の手料理を食べてみたいの」

グ〜キュルル、お腹の虫はタイミングよく鳴いてくれた。えへへ

へへ、目が合わさると

莉子は頭をポリポリかきながら照れ笑いをしてみる。

匠は鼻で息をつき、諦めるように玄関扉を開く。

「何もありませんが、よかったですらどうぞ」

言っただけの言葉、感情なしの降参。そんな音、目の前で鳴らされたら上げないわけに

いかないでしょと。

「んじゃあ、おじゃましました」

おじゃました家の中に変化は見られなかった、それに莉子は安心する。自分に対する態

度はよそよそしくなってるけれど、彼自身は変わってない。

リビングの額縁にある、家族写真に写ってる小さい頃の匠のままだ。いろいろな面で成

長したとしても、根底にある核になつてゐる部分はそうは崩れない。
バカでやんちゃ、頑固

で女好き、昔から自分の隣にいる平尾匠。

自然と顔はほころぶ、彼の後ろ姿を見ながら。

「今日のメニューはなんじゃらほい？」

台所にいる匠に近づくと、後ろから覗き込むように言う。

今日は勇気を出そうと決めて来た、積極的になろうと。

「あれっ、ミートソーススパゲティ？」

「そうだけど、なにか？」

莉子の喜びの灯火がともる。

「もしかして、私がいるから？」

「何言つてんの、元からそうだったに決まってるでしょう」

匠は構わずに料理を続ける、その後ろで莉子は静かに笑った。

ミートソーススパゲティは彼女の大好物。昔は2人で遊んでるとき、お互いの母親がよ

く作ってくれたものだ。ただ美味しいだけでなく、そこには彼との幾重もの思い出がある。

それを彼が作ってくれていることが嬉しかった、たとえ偶然だったとしても。あの頃の

思い出を忘れてないよ、また新しい思い出を生もう、そう言つてもらつてゐるよう。

湧き上がる思いを押し込められず、莉子は匠の髪をくしゃくしゃに掻きまわした。

「お前、何すんだよ！」

「ふふ〜ん、そっちの方がいいんじゃない？」

乱れた髪形に言った、本当は全く似合つてなんかいない。

「なんだよ、怒つたり、笑つたり、訳分かんねえ」

「乙女心は難しいんだよ、勉強しなさい」

素直な発散の仕方じゃなかったけれど、なんだか無性に匠とじゃれたくなつてやった。

昔はよくやったもんだ、取っ組み合いのケンカだって日常茶飯事だったし。親には怒られたもんだけど、本人たちには「好きだからこそ」という気持ちの上でだった。

出来上がったミートスパゲティとゼリーがこの日の夕食だった。少食に見えるけど、意

図があつてそうしてるわけでもない。

朝食はなし、昼食もパンとコーヒー牛乳、そして夕食がこれ。少ないとは思うが、その間に彼はちょこちょこ間食を挟んでいる。夕食まで待てないから、という理由は実に匠らしい。

匠の夜ごはんのおかずは500円、その中で彼は彼なりにやりくりする。この日例えば、ミートスパゲティは300円、ゼリーは100円。合計で400円、お釣りの100円は彼のもの。その100円で間食時の空腹を満たす、ちなみに今日はコンビニの肉まん。その他にも、家に帰って来てからおやつに手を伸ばしたりする。

だから、そう少食というわけじゃあない。量は少なく、回数を多く。

「食べ終わったら、さっさと帰ってくれよ」

そう言われたときには、もうゼリーを半分は食べてしまっていた。そんな不意打ち、卑怯だ。このまま、なんとなくの空気で居ついてやろうと思つてたの

に。このゼリー半分じゃ、時間稼ぎにもならない。介護じゃあるまいし、普通に食べたら

30秒で終わる。30秒の余地、なんとか引き伸ばさないと。

「これ見たいから、これ終わったら帰る」

嘘をついた、罪悪感。今流れてるバラエティ番組がどうしても見たいことにした、実際そんなに見たいわけじゃない。匠がこのチャンネルに合わせたから自分も見てるだけだったのに。おかげで嘘笑いもするハメになる、そこまで面白いとは思わなかったのに。

それでもここにいたかった、2人きりのゆっくりした時間なんて最近はそのうそうう持てないし。何をするわけじゃないし、もがくこともしない。そこにある匠との空間に眠りたくなるぐらいの安息を感じた。自分の気持ちはブレてないんだな、安息の中で莉子はそう憶える。

ガララララ、玄関扉を開けると煮物の濃いめの匂いがしてきた。

「莉子？ 今日遅かったわね」

「うん、たっちゃんの家で夕食ごちそうしてもらった」

「あら、珍しいわね。最近、そんなことなかったのに」

「そう。だから、夕食はちよつとでいいからね」

そう言い残し、木製の艶のある階段を上がっていく。

莉子は自分の部屋に入ると、引き戸を閉めて机に向かう。引き出しからモンチッチのプ

リントされたかわいい便箋とピンクの封筒を取り出すと、息をついて口先をとがらせながらカラーペンを走らせる。

内容をどうしようか、字体はポップなのがいいか、語尾はかわいくしてみるか、気にな

ると細かいところまでいってしまふ。いろいろと頭を悩ませては、

結局シンプルなところ

に行き着くわけだけど。願望と現実の違い、そのことに気づいて。

キョートに見せようと

頑張っても、「気持ち悪い」とけなされるだけだ。

その現実にもまた莉子は息をつく。本当はそんな関係を望んでるんじゃない、もっと近づきたい。

胸の内がシュンとした、自分の気持ちが深くなっていったのが身に沁みた。すぼむ胸

に手を当てながら、目の前のCDデッキを再生する。明瞭なイントロが流れていく、I W i S Hの「明日への扉」。透明な歌声と琴線に届くメロディーと歌詞、1つ1つが彼女に響いていく。

最近よくラブソングを聴くようになった、理由はいたって単純に今までは感覚で聴いて

いたのが、深いところに手を伸ばせるようになった。歌詞の内容も情景も思い浮かべる

ことができ、それを自分にはめることもできる。

窓を開けてみる、身を乗り出すと遠くに匠の家を確かめられる。

2階の明かりが点いて

いた、ちょうど彼の部屋だ。何をしてるんだろう、宿題でも嫌々にやってるんだろうか。

気になるとキリがなくなる、そこから何が生まれることもないのにそして、考えること

を止めようと考える。まだ高校1年生、時間はたっぷりあるんだからと自分を落ち着かせ

て。そうやって答えを出すことから逃げているところもあった、後から悔やむことになるこ

とに気づくはずもなく。

窓外の夜空を見上げる、星はまばらに淡々と光っていた。

「た〜くみいつ！」

「たつちゃんっ！」

また窓越しに莉子の思いきりの声が響く。窓をとおした方が響くんじゃないか、と思い

たくなるくらい。あの大声とこの窓の相性はどれだけいいんだ、と。

「ミートソース、こら〜っ！」

「スパゲティ、起きろ〜っ！」

こんなところで使われるなら作ってやらなきゃよかった、そう思っても後のまつり。

3分15秒、自分で作ったミートソーススパゲティで平尾艦隊は沈没することになった。

起ききらない頭のまま教科書と文房具を平たいスクールバッグに押し込んでいくと、

昨日の帰りにはなかったはずのものがそこに入っていた。

玄関を開くと勝者が「おはよう」と言ってお迎える、なるべく明声になるように心掛けて。

「……おはよう」

莉子の世界が止まった、その横を匠は通り抜けていく。

たつちゃん、たつちゃん、自転車に跨ろうとした匠の腕をつかんで丸くなった瞳で言う。

「今っ、今、おはようって言った？」

確かに聞こえたはずの声、聞き取れない距離でもない。だけど、ちゃんとした確信が欲

しくて訊いた。たかが「おはよう」、されど彼女の中では大きなことだった。

「言っただよね？ 絶対言っただよ、聞いたもん」

匠が「それが？」と言葉なしにうなずくと、莉子は喜色で体を包まれた。どうしようか迷ったけど思い切ってやってよかった、心からそう思った。

シャツ、シャツ、2台の自転車が田園を裂くように伸びる一本道を並んで走る。こ

の日の朝は寒かったが莉子はそれを感じなかった、それ以上の温かみがあったから。

「ねえ、おはようって言ってくれたのっていつぶりかな？」

優顔の彼女からの言葉に彼からの返答はなかった。正解は1年半ぶり、2人が思春期に

差し掛かった頃。子供の頃のように馴れ合う関係に恥ずかしみを感じ、どちらからともな

くどちらもが距離を生んで。

「おはようって良い言葉だね、初めて実感した」

だって、こんなに暖かいものを届けてくれるんだから。

「これからも言うてこうよ、たっちゃん」

「悪いようにはしないからさあ、ねえ」

おねだりみたいにしてると、匠はバッグからピンクの封筒を取り出す。一昨日の夜に机

に向かって30分格闘して、昨日の夜に彼のバッグに完成品を入れたもの。2人が食べ終

えたミートスパゲティとゼリーの食器を匠が台所で洗ってる隙に、バラエティ番組を見て

るフリをして2階の彼の部屋にあるバッグまで特急で往復した。

「これのおかげでプリント忘れずにすみましたが、ありがとうございます」

よそよそしい言葉だった、匠なりに恥ずかしさを押し殺した結果で。

「どづいたしまして」

莉子はフツと笑いながら言った。

雲の隙間から差し込んだ陽光は2人の背中を押すようにポンと触れる。

「北野莉子の明日のおしらせタ〜イムっ！」

1 時限目は日本史、話が退屈でも寝ちゃダメだよ。

2 時限目は化学、苦手科目でも分かるうと努力しなさい。

3 時限目は英会話、先週配られたプリントの続きだから忘れないように。

4 時限目は数学一、私はもうお手上げです、たっちゃんは何で分かるの〜？

5 時限目は保健、昼休み明けで気持ちが悪くなる率ナンバーワン。

6 時限目は英語、もうちょっとで終わるから集中です。

最近はずかしくなってきたとか言ってるけど、まだまだ冷えるから風邪ひかないようにね。

たっちゃん、季節の変わり目で必ず体こわすから気をつけて。

まあ、そんなこと言っておいても風邪ひくってパターンなんだからうけど、アハハ。

じゃあ、明日も布団大好きな匠くんを起こしに行っておあげるからね。バイバイ。」

ピンクの封筒の中にあっただのは、水色で書かれた文字が並んだ、モンチッチのプリント

されたかわいい便箋。一昨日の夜、試行錯誤をかさねて書き上げた北野莉子から平尾匠へ

の2通目のラブレターだった。

第2話

この日の太陽はピーカンに元気だった、よっぽど楽しいことがあったんだろうな。学校

の周りには目立った建物もなく、日光は直射的に降り注ぐ。こんなときは窓側の席の匠が

羨ましい、中央寄りの莉子の席でも充分ではあるけれど。

そんな現状を知ることもなく、ワアワアうるさくしてる平尾匠は客観的に見ると実にバ

カに映る。なんも変わってないようだ、体だけが大きくなった子供みたいな印象。それで

いい、あのバカな感じが私の知ってるたっちゃんだから。

「よかったあ、おいさんに感謝だよ」

林部右太が感謝の言葉を言う、北野莉子の読みは見事的中した。

「よく憶えてたね、匠くん」

「そりやお前、同じ失敗をするなんてボンクラのすることだよ」

「いやあ、持つべきものは友達だ」

しみじみと右太は匠の手を握る。

匠は莉子の方に目を向ける、彼女はムフフと笑みを浮かべていた。それに、彼は口角を

上げただけの不器用な笑みを浮かべる。この手柄は自分のものじゃない、その事実がある

ので素直には喜べなかったから。

「3時限目は日本史、先週はプリント忘れてたから持って来るように。」

右太も一緒になって忘れたから、2人して隣の席の女の子に見せ

てもらってたよね。

机はピッタリ合ってるのに、体は遠慮がちに離れてて、傍から見
てて不恰好すぎて笑い
そうになっちゃったよ。

あんな悲惨な姿を見られなくなかったら、ちゃんとプリント持っ
て来なさいね。」

朝、これを見てなければ、匠は右太と同じ状況になっていた。先
週と全く同じシチュエ

ーションに陥り、自分の不甲斐なさを責める1時間になっていたこ
とだろう。

こればかりは彼女に感謝せざるをえない、そんな日々が続いてい
た。

莉子から匠への手紙は週5日、あの日から途切れることなく送ら
れている。月曜から金

曜、学校がある前日の夜にピンクの封筒は平尾家の玄関ポストに投
函される。翌日の時間

割に対する持ち物、それに簡単な言葉を添えてという内容。

この「簡単な言葉」が莉子にとっての重要部分だった、毎度ここ
で頭を悩ませる。何気

ないことを書けばいいんだけど、それが難しくてたまらない。普
通といっても、普通す

ぎてもつまらない。普通の中でも面白味のあるもの、そのハードル
は思ったよりも高い。

なんとか平尾匠の心に少しでも響くものを、その試行錯誤がいつの
まにか莉子の日課にな
った。

単なる連絡事項を知らせるための手紙、冷めて見ればそう映るか
もしれない。実際、匠

の方からすれば、そういう捉え方で受け取っているのかもしれない。

ただ莉子からすれば

それは違った、彼女にとっては想いを宿している大切な手紙。

純な想いを乗せたラブレター、そういう括りができた。

「あああ、誰のおかげで忘れ物が減ったと思ってるんだらうね」

ため息のように待井一音がつぶやく。彼女には、匠への毎日の手紙の存在を伝えてあつ

た。ここぞとばかりに、「ラブレター？　にくいね、莉子ちゃん」と責められたけれど。

「いいの、いいの、これで少しは内申書もよくなるでしょ」

「健気だね、泣かせるよ」

「何言つてんのよ、お互い様でしょ」

「いつそのとき、好きって書いちゃえばいいのに」

「だっ、ダメだつて、そんなの」

「どうして？　いつかは伝えなきゃいけないもんでしょ」

「でも……」

そう莉子は声を小さくしてすぼんでしまう。下に視線を向けると両頬を摘ままれて無理やりグツと上げられた。

「伝えなきゃ伝わんないよ、あんなバカ。いつまでたつても平行線そのまんま卒業になつてもいいんですか？」

ワイドショーのリポーターみたいに空マイクを向けられる。

そつちだつて一緒でしょ、そう言つてやりたかったけどシッポを巻いて逃げるみたいに思えてやめた。

「んっ、時期だよ、時期。大事でしょ、タイミングつて。ちよつとずつ、ちよつとずつ、事を重ねていくもんだよ」

そう、パスを1つ1つつないでいけば、やがて相手のゴール前までいける。思い切つた

ロングシュートだってアリはアリだけど、可能性が低い。堅実にいこう、そっちの方がきつといい。匠みたいなひねくれ者、強引にしたって余計に閉ざすだけだ。

少しずつ、少しずつ。

夜、一日の家事を終えた匠は2階に上がる前に玄関に寄る。玄関ポストを開くと、いつものようにピンクの封筒が1つあった。それを手にして自分の部屋に向かう、彼にとってもこれが毎日の恒例となっていた。

部屋のベッドに倒れこむと、また起き直して封を開く。モンチツチのプリントされたかわい便箋、これと文字は日によって色味が変わる。今日は苗色の便箋に紫の文字、こういうところに気を遣うのは女の子だなと思う。

「明日からいよいよ学年末テストだね。きつと、たつちゃん最後の悪あがきという名の徹夜勉強に挑むんでしよう。」

まあ、途中で力尽きて泣きを見るっていうのがオチなんだろうけど。

右太に山勘はってもらってるだろうから、あとは暗記だけかな。ちよつと離れたところから応援してるから、せいぜい頑張ってるね。」

「応援してんのか、してないのか、どっちだよ
そう独り言をつぶやく。」

窓を開けて外を見やる、遠目に見える北野家の莉子の部屋はまだ明かりが点いていた。

昔はこの距離を使って遊んだりしたもんだつたな、と思い起こす。蛍光ペンはどんぐら

い光るのかつて、「夜に蛍光ペンで紙に文字を書いて窓から出して相手の家から読めるか」

とか。読めるわけないつてのに、子供だつて分かる常識問題をアホみたいにやっていた。

懐かしいな、そう夜の街を眺めながら感慨にふける。

今だつて充分に楽しい、それはそうだけど昔には敵いやしない。

無条件で全てが楽しか

つた、そんな時期はもう抜けてしまった。どんなに成績が悪くても、どんなに奇天烈な行

動をしても許される年じゃあない。そう思うと、ちよっぴり切なさ

を憶えた。だんだんと自由は面積を失い、行き場を探して迷うようになってくる。何かを犠牲にし

ても自分から取りに行かないと、差し伸べる手も届かなくなつて

いつてしまふんじゃないか。そんな危惧も生じた、青春時代の特有の悩みは例外でなく匠にも降りかかる。

「いや、今回も見事なまでの撃沈ぶりでしたねえ」

机で死んでる匠に、毎度おなじみの言葉が右太から掛けられる。

国語総合が56点、数学一が68点、数学Aが79点、英語一が39点、英会話が52

点、倫理が66点、地理が51点、化学が32点、理科総合が40点、保健が78点、平

尾匠の学年末テストの結果。

「期待を裏切らないという意味ではさすがですよ、おいさん」

「……………うつさい、死ね」

静かに毒づく匠に、ポンポンと右太が背中をたたく。

国語総合が89点、数学一が77点、数学Aが83点、英語一が86点、英会話が94

点、倫理が80点、地理が82点、化学が70点、理科総合が85点、保健が97点、ち

なみに林部右太の学年末テストの結果。

「でもよかったじゃないですか、今回はギリで赤点クリアしてるんだから」

「……………今、お前に何を言われてもムカつくので黙っててください」

一緒に学校でバカやってるはずなのに、歴然とつく大差。おそろく、右太は家に帰った

ら性格を変えたように勤勉家に変身するのだろう。仲むつまじい両親に勉勵的な息子、絵

に描いたような一家だ。朝食は例にならったような和食、おやつはケーキと紅茶、夕食は

煮込みハンバーグ、そんなところか。

嫉妬したところで、朝起きたら家庭が入れ替わってるなんてドラマみたいなことにはな

りやしない。

現実だ、現実を見る、現実を生きる、そう自分に発破をかける。やれやれ、完全に自暴自棄におぼれる匠に、右太は莉子と一音に

白旗を振る。

「まあただよ、あの連戦連敗くん」

頬杖について冷静に見やる一音に閑散的な笑みを浮かべる莉子。「どうして学習しないかねえ、毎回毎回あんな生死の淵に立っ

て」

国語総合が78点、数学一が63点、数学Aが72点、英語一が82点、英会話が90

点、倫理が83点、地理が75点、化学が61点、理科総合が68

点、保健が94点、ちなみに待井一音の学年末テストの結果。

「いいんじゃないの、たっちゃんらしいし」

国語総合が92点、数学一が62点、数学Aが68点、英語一が84点、英会話が92

点、倫理が80点、地理が72点、化学が75点、理科総合が72点、保健が94点、北

尾莉子の学年末テストの結果。

「甘えないの、そんなだから匠が育たないんでしょ」

「私のせい？」

「夫婦連帯責任、旦那のケツをたたくのも女房の仕事よ」

「夫婦じゃないし」

「例えでしょ、いいから勉強教えてあげるなりしてあげればいいじゃない」

「教えるって・・・どうやってよ」

「君は可哀相な子だね、お姉さんが家庭教師してあげるよって」

「そんなん言ったら、100%キれるに決まってるでしょ」

「ウソ、ウソ、そうにしても良いきっかけになるかもしれないでしょ」

「きっかけ？」

「取っ掛かりになるじゃん、匠に近づく。勉強じゃなくてもいいよ、あんな隙だらけな

んだからいくらでもあるでしょうに」

「取っ掛かりかあ・・・」

そういえば、もう明日からは授業がない。それはイコール匠に手紙を書く理由がなくなるわけ、莉子は急に寂しくなった。

始業式まで辛抱しないと、そう思ったけれど間違いに気づく。2年生になってクラスが

別になつたら、時間割も当然変わってくる。それこそ、手紙を書く

理由がなくなってしまう。

そのことが分かると、どっと心内に波が押し寄せようになった。どうすればいいんだ、

せっかく匠と距離を縮められる要素ができたのに。

取っ掛かり、匠と自分を繋げられる何かがないだろうか。

夜、一日の家事を終えた匠は2階に上がる前に玄関に寄る。玄関ポストにあるピンクの

封筒を手にとると、自分の部屋に向かう。

「親父、電気消して、自分の部屋で寝ろよ」

「んっ、ああよ」

リビングのこたつでチビチビと日本酒を飲む父親におやすみ代わりの言葉を言う。酔い

のせいで丸く縮こまった背中小さく感じ、感応する部分はあった。自分もやがてはああ

なるのかな、今の自分だってその過程にいるんだろうな、そう思っ

て。
部屋のベッドに倒れこむとピンクの封を開く、今日は蒲公英色の便箋にスカーレットの文字だった。

「たちちゃん、学年末テストは散々だったみたいだね。」

右太から聞いたけど、赤点はなかったみたいだからセーフちゃあセーフかな。

相変わらず数学だけは良かったみたいで、数学が苦手な私にはたちちゃんの頭の中の構

造が理解できません・・・なんつって、エへへ。

そんな傷心のところでゴメンだけど、今日は私からお願いがあります。

明快に言ってしまうと、私の剣道の試合を見に来てほしいんです。たっちゃん、今まで1回も見に来てくれたことないでしょ。

家の事をやらなきゃいけないとか、友達と遊ぶ約束してるとかで、もしかしたら、最近は余裕があるのに避けられてるのかもしれないけど………。

今週の土曜日なんだけど、もうテスト休みに入ってるから多少は時間つくれるでしょ。

四校との練習試合で、私は個人も団体も出るようになってます。

たっちゃんがOKなら、詳しいことは後で教えるんで前向きに検討しておいてください。
「

剣道の試合、そういえば1回も見に行ったことなかったな。学校の習い事するときなら

ともかく、部活でやりはじめてからは意識もあった。思い込みかもしれないが、なんか女のケツを追っかけてるみたいで応援は気が引けた。自分がそれに見

合うぐらいの肩書きが

あるならいいが、帰宅部じゃ背中丸まるばかりだ。

どうしようか、行くか行くまいか、匠は天井を向いて目をつむりながら考えた。

翌日、部活終わりで少し濡れた髪をなびかせながら、莉子は自転車を走らせる。

この時間になるともう辺りは暗くなり、その中を独りで進むのは正直怖かった。のどか

な街であるからこそその静けさも、このときには敵になってしまう。

正直どこかに蛙や虫がいても分らないし、実際に小虫を潰してしまったこともある。ブツという僅かばかりなのに確かな感触があり、何を踏んだのかと見てみると小虫の潰れた跡があつた。夜の暗闇に訳のわからない液を流した小虫の死骸、それはもう気色悪いことといったらない。

住宅地を分ける一本道を軽快に進んでいく、左に自宅がある曲がり道を右に折れると平尾家はすぐそこにある。

表札の前に自転車を停めると、気持ち高鳴る鼓動を静ませて玄関に向かう。玄関扉の前にくると扉に挟まれたノートの切れ端を見つけ、それを開く。開いた結果、どうという言葉が待つていてもいいように覚悟は決めておいて。

中味を確認すると、莉子は電気の点いているリビングの方を見やうて笑みをこぼした。

「しょうがねえ、いつてやるよ」

匠からの答え、恥ずかしさを隠してるのは文章から読み取れた。すごく温かく感じた、なんてことない紙切れが。向こうにそんな気がなくても、彼女がらしたら寒空の下で冷えきつた両手を元通りにしてくれるホカロンぐらいに思えた。

莉子はその場にしゃがみこみ、手帳の切れ端にシャープペンを走らせていく。吐く息は白く、手はかじかんでいるけれど、そんなことは大して気にならなかつた。それよりも、この匠からの一文への返答をしたためたくて心持ちと同様に手が先に動いていく。

書き終わると、それを2つに折って玄関ポストに入れる。

そこから自宅までの帰り道は自転車を引いていった。もうちょっと、この嬉しさの余韻にひたっていたくて、はにかむ口元をマフラーで隠しながら歩いて帰った。

「来てくれるんだね、ありがとう。」

「たっちゃんに見てもらおう初めての試合かぁ、なんとしてでも勝たないと。」

「負けたりなんかしたら、後で弱っちなとか言われそうだもん。」

「意地でも勝つから、褒め言葉でも用意しといて。」

「んじゃ、しょうがなく来てくれるたっちゃんへお知らせです。」

「試合は土曜日の13時半から、場所はウチの高校の剣道場。」

「来ると言ったからにはキャンセルは無効、寝坊などによる遅刻等は厳罰に処分します。」

「気温は16、雲はまばらにしかない快晴の中、1人だけ心の晴れてない北野莉子がいた。」

「なんで、なんで、なんでよっつ。」

「莉子、莉子っつ。」

「そう手を大きく振る一音のもとへ、あとは面を被るだけの剣道着に身を包ませた莉子が」

「近寄る。いつになっても全然姿を現す様子のない匠にしびれを切らし、一音と右太が搜索にあたってくれていた。」

「どうだった？」

「それがさ、右太が携帯かけまくったら「今、起きた」って。寝起き全開の声で「今か」

ら行くから」だって、最悪だよ、ホントに「

13時25分、今からじゃ間に合うかどうか。

せつかくのまたとない機会なのに、私が起こさないと1人で起きれもしないのか。シュ

ンとしほむような気持ちとムカムカと苛立つような気持ちとが対称的にぶつかりあう。

北野さん、剣道部のミーティングの輪に呼ばれると、「じゃあね」と一音から離れる。

その莉子よりも苛ついてたのが一音だった。あんのバツカやろう、匠の家まで行って学

校まで引きずってきたい気持ちでいっぱいになる。

「右太！ 匠が来たら、コンマ1秒でも早く剣道場まで連れてくんのよ！ いい？」

「………はあ」

「どんな手荒なこととしてもいいから、担いででも連れてきなさいよ！」

ブチッ、自分の頭の線のように強めに携帯のボタンを押して切る。

なんなのよ、毎度ながら自分のペースで動く匠にじれったさが募る。その感情は、平尾

匠と北野莉子の関係に対しても同じといえる。彼女自身、莉子の今日までの表情の変化を

見てきてる分、余計にそうなってしまふ。

「聞いて、聞いて、一音ちゃん」

数日前の電話越しの莉子の第一声、聞いたことないくらいいたるんだ声音。ベッドに寝

そべりながら、意味もなく毛布にくるまって右に左に回ったりしてそんな感じ。

「どうしたの、なんか嬉しそうじゃん」

「うっそ、なんで分かるの？」

心の中の「分かるって、そりゃ」というツッコミは閉まっておく。物事の全ての奥底に

ある欲を見抜こうとするような人間じゃないかぎり、誰が聞いても彼女が嬉しそうだと思

うだろう。第一、こっちのことを「ちゃん」付けで呼ぶなんて、お金を貸してほしいとか

裏がある場合ぐらいだし。今にかぎってはそれが感じられない、裏なんか一切なしの表だけといった声音をしてる。

だから彼女は嬉しいんだろう、言葉の色合いのとおりだ。

「なに、なに、聞かせてよ」

「聞きたい？ どうしようかな」

心の中の「悩んでないでしょ、それって」というツッコミは閉まっておく。

「いいじゃん、どうせ言うんでしょ」

「分かったよ、一音には特別に教えてあげちゃう」

何事があったんだろう、一音はまもなく答えの分かることを予想してみる。

あんな感じの喜びようは中々ない。もちろん彼女は毎日笑顔のたえない子なんだけれど、

それとはまた違うポケットに入ってる感情を取り出してるように感じれる。

「あのね、土曜日に試合があるって言ったでしょ」

「うん、うん、聞いた」

「それにね、たっちゃんが来てくれることになりましたっ」

「うっそ、マジで？」

あの匠が。親友の右太の野球部の試合ですら、「面倒くさい」って見に来ないやつが。

どうい風吹き回した、もしかして2人になにか進展でもあったのだろうか。

「なんで？　なんで、匠が来るの？」

「私がお願ひしてみたの、試合があるから見に来てほしいって。そしたら、「しょうがねえ、

いってやるよ」だって」

「………匠らしい返事ね、それはまた」

「絶対に負けらんないよ、今度は。明日から猛特訓しないと、たっちゃんの前で変な試合

はできないもん」

「そうとう好きだね、あんた」

「えっ、何が？」

「………剣道が」

「何言ってるのよ、やあだっ」

ダメだ、完璧に乙女になってしまってる。

これは何を言ってもムダだろう、そう息をついてあきらめる。なんにしても良いことだ、2人が少しでも近づいてくれたのなら。

あれから3、4日しかなかったけど、莉子がその間でどれだけ頑張ったかは知ってる。

自分のバスケ部の練習の合間をぬって剣道場を訪れると、彼女の佇まいには気迫が宿って

いた。面を被ってるときの集中力は道着を通しても伝わるし、それ以外のときでも真剣な

眼差しで自分の剣道と向き合っていた。なんで匠の前でそれだけ素直に真つすぐになれな

いんだ、と考えると少し笑えたりした。

部活終わりで、途中まで一緒に帰ろうと自転車を引いているときの彼女は真逆になる。

「どうしょ、勝てるかなあ」

「勝てるに決まってるでしょ、あんなに練習してるんだから」

「でもさあ、相手だつて練習してんだから同じじゃんか」

ホントにさつきまでの莉子が、そう疑いたくなるぐらいの弱気だ。きつと、匠が来るこ

とがプレッシャーになつて、不安にさせてしまつてるんだらう。

「あああ、もし負けたら立ち直れないかもしないよ」

「まあ、あんたさあ、勝ちたいの？ 負けたいの？」

「なによ、勝ちたいに決まつてるじゃん」

「だったら、勝つことだけ考えなよ。負ける心配してるなんて、最初から気持ちで負けるからだよ」

ムスツと口をへの子に曲げる莉子の頭を優しく撫でてあげる。

「いいところ見せたいんでしょ、頑張んなよ」

「………うん、ありがとう」

清顔でニツコリ微笑むと、莉子も砕けた笑みを見せた。

莉子に勝つてほしい、それを匠に見てほしい。

なのに、この大事なときに寝坊つて、どんだけ枕が好きなんだよ。

「右太！ もう次だよ、まだ来ないの？」

「俺に声張り上げられてもなあ……あつ、来たっ！」

50m先の角を曲がつて、自転車に乗った匠の姿が見えた。

「おいさん、何してんだよ！」

「悪い、寝過ぎした」

校門の右手にある自転車置き場に行こうとする匠を引つ捕まえて、強引に走り出す。持

ち手のなくなつた自転車は、そこにガツシヤンと倒れて。

「おい！ 自転車！ 自転車！」

「大丈夫、壊れやしないつて」

首根っこをつかんで引きずるぐらいに容赦なしに右太は匠を引つ張つていく。上靴にも

履き替えず、靴下のみまで校内を一目散に駆ける。「廊下は左側を

歩きましよう」の張り紙の横を突つきり、剣道場に行く道に折れると遠くに大きく手招きする一音が見やれた。

「あんた何やってんの！ ほら、早く見てっ！」

到着早々にお叱りが入ると、一音の示す指先の方に莉子の姿があった。もう試合は始まっている、開始から1分ほどが経っているらしい。

道場の手前側で男子の試合、奥側で女子の試合が行われているため、「北野」と大垂に付けられた名前と「やあっ」などの掛け声でしか彼女と判別はできなかった。正直、相手の子と入れ替わっていたとしても気づきはしない。

だが、対戦相手と莉子とは明らかに違いがあった。初めて間近で剣道の試合を見る素人が言えた義理ではないのは承知だけれど、2人はなんだか格が違うぐらいの差を感じる。

相手の子の動きは教えられたものを忠実にこなしているような教科書どおりのもので、莉子は1つ1つの動きがしなやかで浮かびながらやっているような跳ね方をしていた。最終コーナーを過ぎた競走馬や名声のある新体操の選手のように。

県下何位つてのは本当だったんだな、そう実感する。

試合は莉子が小手で勝った、フェイクで開いた右の小手を見逃すことなく打って。試合時間は2分28秒、匠が来てから1分半ほどで勝負はついた。

試合場を出て面を取った莉子の姿は、いつも近くにいるはずの彼女とは瑣末に合わない

気がした。同じ場所と同じ角度から撮影した、今の太陽と10分後の太陽の画を重ねたと

きに生じる誤差ぐらい。戦いに向かう剣士のように、楚々としながら力強いものを持ち合わせて見えた。

そんな彼女に見とれているうちに、莉子の視線がこちらに向く。目があったまま、莉子

も匠も何をするともなく、ただそれを逸らすようなこともなかった。

一音が手を振ると、ようやく莉子も笑顔を戻して手を振り返す。一音は次に匠を指差す、

「やっと来たよ」とでもジェスチャーしてるのだろう。

2人の通常のやり取りで我に返り、視線を外していると一音に腕をバシツと叩かれる。

何かリアクションでもしてあげなさいよ、そう無言で促される。何をしていたかが分からない

ので適当に最小限の角度で手を振ると、莉子も口角を上げて手を振り返した。

「ホントにどうしようもないよね、匠って」

「うつせえな、来たからいいじゃねえかよ」

「来たって、私たちが起こしてギリギリにでしょ」

「まあまあ、結果来たんだからいいじゃない」

匠と一音の言い合いを右太がなだめる。

「莉子もバシツと言わないと、ほらっ」

2人の言い合いを笑いながら見ていた莉子は、急に怒りなさいと向けられてどうしよう

か悩む。

「……………いいよ、来てくれたんだから」

フツツと笑う、なんだか匠はそれに申し訳なさを感じた。

「ほらほら、もう一音だけだよ、怒ってるのは」

「……………ちえっ、なんか腑に落ちないなあ」

形成の変化に、一音もしようがなく手を上げる。

個人戦が一段落し、団体戦が始まるまで10分の休憩が設けられた。その間に莉子は3

人のところへ来て、個人戦の緊張と疲れをほぐす。

「どうだった？ たっちゃん」

私の剣道姿、そう聞くと匠はどう返していいか分からずに考える。

「どうって、別に」

一度、はぐらかしてみる。

「あんたねえ、なんか感想とかないわけ？」

予想どおり、一音からの横入りがくる。

「まあ・・・よかつたんじゃないの？」

疑問形の返答に疑問系。

「うん」

莉子にはそれで充分だった、精一杯の照れ隠しであるのは読み取れたから。匠がここに

来てくれてるだけで、彼女にとっては嬉しすぎることだった。

「今の感じだったら、調子いいから団体もいけそうじゃない？」

「そんなことないよ、団体はお互い良い選手をそろえてくるんだし」

「いいや、もう負ける気がしないよ、莉子の力なら」

「でも、団体の相手は2年生だから。1年違うだけで、結構レベルも変わってくるんだよ」

素人目にしたら何人来ようと返り討ちにしまいそうな莉子の腕だったが、本人はい

たって冷静に次の試合を見ている。

北野さん、剣道部のミーティングの輪に呼ばれる。

「おいさん、お前からも何か言ってるやんなよ」

右太に促され、「何か気の利いたことでも言わないといけない」
空気が流れる。

「まあ、頑張れよ・・・お前なら勝てるよ」

「うん、ありがとう」

匠からの気持ちの入ってるか分からない励ましに、莉子の締まっていた顔が崩れて笑みになる。結局はこれが1番の特効薬になる、「頑張れ」と言ってもraithたい人に「頑張れ」と言ってもらうことが。

それは結果に如実に現れた、これ以上はないというほど。

先鋒・北野莉子、その合図で試合場に向かう姿は邪気を打ち消した凜としたものだった。

試合時間わずか17秒、接近したところからの引きの面が見事に入った。

試合場を出て面を取った莉子は、会心の勝利で得た会心の笑みを匠たちの方へ振り撒く。

あまりにもスピード勝負に匠はおろか、毎回彼女の試合を見ている一音でさえ口が開いていた。

「すごいわ、なんとかの力ってやつは」

「んっ？」

「いや、なんでもない」

耳にしたことはあっても目にしたことはない、その力を目の当たりにして一音は首をかしげて匠を見やる。

「おいさん、きつとこれから毎回来させられる運命になるぞ」

ポン、そう悟った右太が匠の方に手を置く。

「んっ？」

「いや、なんでもない」

この勝利は莉子本人の実力によるもの、そう感じてたのは匠だけだ。周囲の心内を知ることもなく、彼は彼女への見る目のランクを上げていた。

その日の夕暮れ、黄昏時に右から左へ流れる風は莉子の体を少し

暖める。いくらか濡れ

たその髪を気持ち程度になびかせ、風は未来の方へ流れていく。

練習試合を終えて、帰路につこうとすると自転車置き場に見慣れた姿を確かめる。ふて

ぶてしいオーラを出して、両手をポケットに突っこむ姿は幾度と見てきたものだった。

「たっちゃん」

「おうっ」

莉子は驚く、もうとっくに彼は帰ったものだと思っていたから。

「どうしたの、こんなところで」

「んっ、いや……」

はつきりしない返事、その空白に莉子は感じ取る。

「もしかして、今まで待ってくれてたの？」

「まあ……そんなとこ」

後頭部をポリポリかきながら、キャラじゃない自分に匠はこしょばゆさを感じる。

「なんだ、待ってるなら言ってくれば早くしたのに」

莉子の試合が終わってから1時間半は経っている、その間ここで待っててくれたのか。

「いや、さっきまで右太と一音とだべってたし」

莉子はフツと顔を下に向けて笑う。

言い訳してるみたいな言葉回し、ホントに匠はこういうシチュエーションがダメなんだ

な。そんな彼が愛おしくなる、その不器用さに胸の内をつかまれて

「なに笑ってんだよ」

「ううん、何でもないよ、帰ろう」

自分の自転車を取り出すと、その2台はオレンジに染まる夕焼けに向かって走り出す。

莉子はスピードが上がりぎみになる、意識的というよりは速めになっっている鼓動と連動

するように。

右隣を走る匠にバレないように、何度もチラチラと右に視線を向ける。今日の心はすこ

く素直だった、匠を見るといやに反応をして。

昨日の匠よりも今日の方が好き、だから明日はもっと好きになつてゐるんだろつなど。

第3話

心が洗われるような空間だった。日々の中で溜まっていたストレスやらをスツとどこかに流してもらえような。

公園を入ったすぐ左手には、ジンチョウゲの花々が良い香りを放っていた。白と紫に色づく花びらは咲きごろを呈していて、その美様に迎えられている感覚に苛まれる。

レンガが敷き詰められて出来たいびつな道の先へ行くと、左右への選択権をせまる分岐点へ。そのまま真っすぐ突っ切ることとできる、左右に分かれる道が囲むように中央にはこれでもかというほどの大きさの野原が広がっている。サッカーぐらいなら誰でもできるぐらいの幅がある、奥行きはどこまでも伸びていきそうなほどだった。

前に行く平尾匠は迷うことなく右の道を選ぶ、それに続いて北野莉子も右へ曲がる。そこから切り絵で描くハサミの切り取り線みたいに曲がりくねった道が続く。

心の底から気持ちよかった、今年1番の温暖日になった今日の気が自分に味方をしてくれたようにも思えた。

もう、春はその顔を完全に見て取れる時期に入っていた。今日の春の顔はニコニコしている、その笑顔のまぶしさが光になって大地に降り注ぐ。高い気温と直射の日光で、長い

冬の寒さに慣れていた体は違和感を憶える。まるで初夏に差し掛かったような錯覚になり、ジャンパーを着ていた匠はいいが、ニットセーターを着ていた莉子は汗が滲んでくる。

「暑いね、なんか今日」

「……………うん」

単調な返事、きつと上の空でいたんだらう。でも、気持ちは分かる。こんなうららかな

日和に包まれてるんだから、何も考えずにただこの温かみの中になりたい。

砂利道を進んでいくと、いろいろな人たちと擦れ違っていた。

ランニングをするジャ

ージ姿のお爺さん、5歳ぐらいの男の子が先頭をきつていく家族連れ、今このときが最上

に幸せだと頭の上にも書いてそうな高校生のカップル、鬼ごっこでもしてるのか全速力で駆けていく子供たち。

その誰もが善良に見える、この公園を訪れる人に悪い人はいないだろうと。鬼ごっこをしている子供たちの鬼とおもわれる子が通り過ぎる、鬼であるあの子でさえ正義の味方に感じれる。

見上げると、緑々と生氣にあふれる緑の世界の中を自分たちの歩いている砂利道の白が通る景色はまだまだ長くあった。

今日は匠のとおっておきの場所である、この公園に莉子が初めて足を踏み入れた。

先日の剣道の練習試合の勝利のごほうびといきたいところだが、実際はそんなキレイにはいっていない。

「どうして、わざわざ待っていてくれたの？」

練習試合のあった日、一緒に自転車を走らせて帰ると、匠の家に着いたときに莉子は言った。
「何が？」

「いや、なにか裏がありそうだなあって」

匠が1時間半も自分を待っていてくれたのは嬉しかったし、素直に受け止めたい。ただ、つむじまがりな考えかもしれないけど、彼がそんなことをするのは主だった理由がありそうない。
「お前のことを待ってたかったから」なんて言われたら顔が真っ赤になっただろうけど、

そんな直球な人間じゃないのは百も千でも分かっている。

匠は一度視線をはずして、また莉子の方へ戻して言う。

「一音から言われた」

ああ、もらすように息をつく。莉子はその一言で全部を分かった。
「私のことを待っていてくれ、って？」

「来る時間が遅いんだから、帰る時間が遅いのも当然でしょ、ってさ」

フツと莉子は笑みを見せるが、内心はすきま風に似た空しさがあった。やっぱり自発的に待っていてくれたんじゃないのか、その事実。

「それで、嫌々に私のことを待ってたんだ？」

「……どうだろう」

そうはぐらかされたけど、心内では一音にナイスアシストと思っ

本当に嫌だったら、匠の性格からして真っ先に帰ってるだろう。なのに長い時間あんな

自転車置き場で待っていてくれたんだから、少しぐらいの蛇足はいいでしょう。

「そうだ、いいこと思いついた！」

明るい顔をして言うと、莉子は両手で支えていた自転車を停めた。せっかく匠がいつも

より心扉を開いてくれてるんだから、もうちょっと一緒にいたいと「たっちゃん、今度どっか連れてってよ」

莉子は緊張していた、こんなこと言ったのずいぶん久しぶりだったから。

「どっかって、どこだよ」

匠はウザそうに言う。ホントにウザいのか、本当の感情を隠してのものなのかは読み取れない。

「どこでもいい、たっちゃんの好きなところ」

好きなところ、漠然とした返答に匠は後頭部をかきながら考える。

「それは、右太や一音も誘って？」

「えっ」

匠の言葉に莉子は困る。彼は照れて4人で行く提案をしたんだろうけど、彼女はそれをしたくない。

「そうそう、4人だったら盛り上がるからね」と言いそうになつて、その言葉を喉元か

ら飲み込むように戻す。「勇気を出せ、北野莉子！」と、何度も自分にエールを送る。

「うっん……」

莉子がかぶりを振る、次の言葉がうまく言えなくてもどかしくなる。言うことは決まっ

てるのに、そう自分を奮い立たせるようにもう一度かぶりを振る。

「……………たつちゃんと、2人で」

緊張で固まりそうだった、正直もう泣きたいくらいに。

それに反するように匠は顔色の1つも変わらない、なんでそんな冷静なんだとやきもきしてしまつぐらい。

「考えとく、行くところ」

そう言うと、「じゃ」と家に入っていった。莉子も「じゃ」としか返せず、遠くなる匠を置き物のようにただ見ていた。

その姿がなくなると、莉子はその場にペタンと崩れる。さっきまでの一連の自分を思い返し、頬の色が変わりそうになるのを両手でおさえる。地面はまだまだ寒風で冷えていたけれど、それ以上に彼女自身がほてって熱くなっていた。

急くようにスクールバッグから手帳とシャープペンを取り出し、手帳の切れ端に書きなぐったものを玄関ポストに入れる。

早くこの場から離れたい、逃げるように自転車に飛び乗るとペダルを全力で漕いでいく。

「今日は試合を見に来てくれてありがとう、嬉しかったよん。匠コングクターのおすすめスポット、お待ちしてまつす！」

おちゃらけないと、このドキドキを元に戻せなかった。匠に気持ちがあが筒抜けになつてるんじゃないかと思うと、堪えきれないから。

白や灰色、ところどころの黒という色合いの連なっていく砂利道を歩き出して10分ほどになるだろうか。ゆっくり歩を進ませてることもあるが、この公園の広さに感激を覚える。

しかし、その奥行きも最後をむかえたようだ。入口で左右に分かれていた2つの道が繋がる、ここが砂利道の終着点。

あとは左側の道を通って入口へと戻るのか、そう思っていたら匠は先を行きはじめる。

砂利道を抜け、ガサガサと草地に足を踏み入れていく。

「たっちゃん、どこ行くの？」

そう聞くと、こちらを振り向くこともなく

「着いてきて」

と一言だけがあった。

何も無い草地、向こうには行く手をさえぎるように木々が横一列にそびえている。行き

止まりに向かう、方向音痴の運転ドライバーがなんとなく浮かぶ。

こんなとこ進んでどう

するんだ、莉子の頭には疑問符がとるのみになる。すると、匠は目の前の木々の隙間を

かいくぐりながら先に行く。莉子は訳も分からぬまま、彼に着いていくしかなかった。何

度か木に体をかすめたため、木のくずが匠のジャンパーや莉子のニットのセーターに刺さるように付く。

5本から7本ほどの木を抜けると、その先の別世界が2人を待っていた。一面の緑地、

そこを貫流していく野川、川を挟むように伸びている紅葉の木々。

映画の世界に身を置い

てるような、自然に彩られた景色が目の前に広がっている。感動という言葉はこういうと

きに使うんだなと思わされるほど、心を奪われた。

「すごい……」

それしか言えなかった、それで充分だったし。

匠はある程度は見慣れてるからか、構うことなく歩を進ませる。

莉子も後を着いていく、

やがて野川に差し掛かる傾斜で止まった。

春のただよう温暖、空から浴びる陽光、真っ白な雲が不定に並ぶ青い空、透き通る野川

のせせらぎ、緑々と生い茂る草木。その中に囲まれると、なにか大きな力を注いでもらえ

るような感覚になった。体にみなぎるように心を清らかに洗ってもらい、清廉とした心持ちにさせてもらえた。

「ここ、たっちゃんが見つけたの？」

「見つけた、ってほどじゃないけど……まあ、そんなもん」

「すごいね、たっちゃんのオリジナルスポットだ」

「そんなことないけど、他の人だって来ることあるし」

ただ、今にかぎっては、そこは匠と莉子の2人だけのものだった。

「でも、今は貸し切りだよ」

「まあね、あんまり人来ないから。こういうふうになるし」

匠はジャンパーを見せる。いくつも木のくずが付いて、わんぱく小僧みたいだった。

「なるほど、そういうことね」

フツツと笑うと、匠も続く。

「でもさ、水くさいよ。こんな良いところ知ってるなら、教えてくれてもいいのに」

「嫌だよ、俺だけの憩いの場のつもりだったんだから」

俺だけの憩いの場、だけど莉子にはそこを紹介してくれた。それ

に彼女は喜色を憶える、

匠にまた近づけた気がして。

「ホントに素敵なおところだね」

「うん、ここ来るとさ、なんだか良い人間になれるんだよ」

「へえ・・・その割には、なぜか捻くれてるよね」

「どういう意味？」

「そういう意味」

笑いながら言うと、匠は

「この野郎っ」

と莉子の髪をくしゃくしゃにする。

「まあ、何すんの！」

「自業自得」

「バカっ！ 全然良い人間なんかじゃないじゃんか」

匠は不器用な笑みを浮かべると、知らないといったふうに草地の傾斜に寝転がる。

いくだっ、そう顔を崩して届かない気持ちばかりの仕返しをする
と、莉子も匠の側に寝

転がる。

足元に生えてる草々は風に揺れ、2人の体をくすぐるようにする。

心地良い春風は2人

を通り抜け、その先へ吹いていく。

その柔らかさに負けたように、しばらくすると匠は眠りにつく。

それを見届けるように

して、莉子も眠りについた。

目を開くと、青と緑、空と草々が視界にあった。一瞬ここはどこだと疑ったが、記憶を戻すと「ああ」と体を起こす。先まで見渡せる、永遠に続いていくような景色に変わりはない。

視線を降ろすと、寝入ってる匠の姿があった。寝息をたてて完璧に沈んでる、こうなったら中々起きないのが常。朝は毎日の莉子の連続攻撃、昼寝は先生にはたかれないかぎり目は覚めない。

莉子は何か意地悪でもしてやろうと、彼の方へ忍び寄っていく。ササツ、擦れて鳴る草の音は最低限におさえて。

寝息をうかがって顔をのぞく、油断しきった顔つきだ。莉子はそのまま匠の顔を眺めていた、なぜだか見取れるように見入ってしまった。その寝顔はいつもの性質のねじけた匠とは違って、従順なものだったから。

あまりに自然に体が動いた、ここからの景観と同じぐらい整然と吸い込まれるように顔を近づけると、目の前の匠の唇に口づける。

時間にして20秒くらい、息をかけてしまつと起きてしまいそうだから呼吸を止めていられるだけの時間。息がどれだけ続くかという方に神経がいつてしまつて、キスに集中しきれなかった。

唇をはなすと、またおさえるように彼から離れる。元の自分の位置に戻ると、急に冷静になつて恥ずかしさが込み上げてきた。彼に背を向けるように寝転がり、「何やってんの、私」と心内に何度と叫んだ。

ファーストキス、なのに自分はなにを大胆なことをしてるんだと羞恥心にやられる。鼓動は速度を上げることが止めず、過去にないドキドキに襲われてく。押さえ込もうと身を

抱えても、関係なしといったようにそれは続いてく。

「うん……」

もがくように動いてたせいか、匠が目を覚ましてしまった。

ちよつと待つてよ、まだ心の整理の出来てない莉子は無理やり
自分を落ち着かせよう

とするが無理な話だった。

「俺、けつこう寝てた？」

「んっ、そう、それなりに」

動揺してるのが丸分かりだ、彼には伝わってないとしても。出来
損ないの自分の恋心情
の移ろいが嫌になる、これまでそれを使うことをサボってた自分
も。

「何？」

「えっ？」

知らないうちに時間が止まってるみたいに莉子は匠の顔をじつと見
ていた。匠は顔に何か

付いてるのかと思い、その裏を読み出す。

「お前、顔になんかしたろ」

「へっ？」

莉子の返答はキーが上がっていた、心臓に針でも刺されたぐらい
になって。

それで匠は確信を得る、きつとイタズラ書きでもされたんだろう
という間違った確信を。

「ふざけんなっつうの」

息をつくほどに小さくこぼす、寝起きだからか呆れてかは分から
ない。

「ちっ、違うから。何もしてないから、ホントに」

必要以上に莉子は否定をする、それが逆に怪しかった。

なら証拠に残らないようなイタズラをされたんだろう、と匠が思
うだけだ。

「いいよ、別に」

そう起き上がると、体についた草を手ではらって匠は歩き出す。

莉子は同じようにして、

彼を追いかけるように歩き出す。

家に着いたのは日暮れ方、青空も残りながらオレンジが相まって変にキレイに思えた。

ケンカをしてるわけじゃないが、帰り道の間匠と莉子に会話はなかった。匠は特に

う何を感じてるわけじゃなかったけど、莉子は罪悪感が残って彼に目を合わせることもできずにいる。

「ねえ、なんなのこれ？」

匠はいい加減イヤだった、自分が怒ってるでもないのに莉子がどんよりしてしまってるのを。

顔を上げた莉子は、おもちゃを買ってもらえなかった子供みたいにしゅんとしている。

「何もしてないんでしょ？」

「そう・・・だけど」

本当はキスしました、なんて口が裂けても言えやしない。

「何かしたんだろうけど、何もしてないんでしょ？」

「・・・うん」

「じゃあいいじゃん、何もしてないんならさ」

言葉はなしに、莉子はうなづく。

「そんな下向かれると、とっておきの場所にまで連れてった俺の気分までそうなるから」

「・・・分かってる」

「なら顔を上げなさい、そして楽しそうな顔をしなさい」

言われるとおりにやってみた、匠よりも不器用な笑顔になった。

「……いいや、もう」

息をつくとき、匠は「じゃ」と家に入っていく。その姿が見えなくなる。莉子は静かに泣いた。

こんなふうにしたかったんじゃないのに、後悔の念で体がいつぱいになる。もつと楽し

くふざけまわるようにしたかった、実際に途中までは順調だったし。勝手にキスなんかしたバチがあたつたんだ、そう自責の念に駆られる。

多分、あれは匠にとってもファーストキスだったはず。匠には中学時代に彼女が1人いたけど、周りに聞いたかぎりではキスまではいってない。莉子も同じく中学時代に彼氏が

1人いた、ただ彼女もキスはしなかった。大人への階段を上りたがる年ではあつたけど、心の中には別に確かな相手がいたから。

唇に手を触れてみる、まだ彼の意外に柔らかかった唇の感触が残っている。触れていた

手の先に涙がこぼれると、緩んでいた心が締まった。このままで帰っちゃいけない、それが強い思いになる。

気持ちが高揚していたせいか、心にある言葉を素直に手紙に書き出した。それを玄関ポ

ストに入れると、ようやく莉子は心の重荷を取り払うことができた。

「今日はある素敵なところに連れてってくれてありがとう。

本当に嬉しかったよ、これに嘘偽りはございません。

たっちゃんだけの安らぎの場所に招待してもらえて幸せだった。

最後は困らせちゃってごめん、私のせいで。

私だけが悪いの、たっちゃんは気にしないでね。

押しつけがましいかもしれないけど、もう一つお願いしてもいいですか？

いつでもいいから、またあそこに私を連れてってください。
それじゃあ、またね。」

新学期をむかえ、匠と莉子は2年生になった。

そして、莉子の懸念は悪くも正解となってしまう。クラス替えで2人は別々になった、

匠は2組、莉子は4組。1/36という、わずかの可能性に賭けていた彼女の思惑は35/36に打ち砕かれた。

ただ運が良いのか悪いのか、一音が2組、右太も4組に入る結果となる。

「なんで、私があんたと一緒なのよ」

ため息をつきながら、一音は言い捨てる。

「いいじゃないの、仲良くいきましようよ」

なだめるように、匠が言う。

「あああ、天は私を見放したのね」

そう言い、一音は机に軽く崩れる。

「まあ、右太と一緒になれなかったのは悔しいだろうけど気にすんな」

「ちよつ、バカなこと言わないでよ。莉子に決まってるでしょ」

そんなこと言っちゃって、とニヤつく匠が腹立たしくなる。

「最悪だよお、こんな変態くんと同じなんて」

もおお、そう机をドンドンたたく。

「まだ根に持ってるのかよ、相当しつこいな」

2年2組、どうにも重ならない子供コンビの完成。

「ごめんよ、一緒になったのが俺で」

「なんでよ、右太と一緒になれてよかったよ」

「そう、それなら安心」

2年4組、子供ではないが大人にもなれていないコンビ。

「匠のことなら、俺も2組に行ったりするし、一音に聞くのもいいし」

「別にいいよ、気を遣ってくれなくても。朝起こすのは変わってないから、どうせ毎日のように顔合わすわけだし」

そう、右太は笑みを見せる。

「右太は？ 一音と離れて淋しい？」

「そうだなあ、うるさいのがいなくて物足りないかも」

そうだねと言うと、2人でアハハと笑い合う。

「右太もアレだね、一音の気持ちに気づいてるのに何もしないんだから」

「なんていうかね、向こうからアクション起こしてもらわないと。」

自慢じゃないんだけど、

今までの恋愛って全部相手から告白してもらってきても。そういうの言ってもらえないと、

こっちも本当の気持ち分からない体質になっちゃって。俺もみんなのこと言えないくらい、単純で複雑なんだよね」

妙に納得した、青春時代なんて単純すぎて複雑すぎる。

1週間、2週間、何が起きることもない平和な日が過ぎていく。

春の世界のように穏や

かで、それは4人にとってみれば平和ではなく退屈といえた。クラスに仲のいいメンバー

はできたけれど、しっくりくる感じじゃない。

窓の外にはふわふわ流れてく雲々、廊下にはぎゃあぎゃあ騒ぐ生徒たち。どこか蚊帳の

外のように感じられた、いつものメンバーがいないだけで。2組と4組を行き来すること

はあっても、器用に2人に声をかけられるのは右太だけで、匠は莉子、莉子は匠、一音は

右太にはなにか気さくには話しかけられないのが現状だった。下手に意識してしまってる

せいか、クラス2つ分の壁がやけに大きくなっていた。

「莉子ちゃん」

部活終わりに帰ろうとすると、下駄箱で一音が待っていた。

「一緒に帰ろうか」

「うん」

自転車を押しながら歩いていく、歩くスピードは前より遅くなった。クラスが違う分、

お互いに話したいことが増えたから。それを話しきるには、これまでのスピードでは速すぎた。

「1年の新入部員の子に負けたんだって、剣道部の子から聞いたよ」

「ああ・・・ちよつと油断しちゃって」

「最近、集中できてないんじゃない？」

「うん・・・でも、それは言い訳にしかなんないし」

「あああ、やっぱり莉子には匠の力があるのかあ」

「なにそれ、意味わかんないよ」

はぐらかしてみたけれど、思い当たる節はいくらでもあった。

「あんなのが力になんのかあ、私には怒りしかくんのに」

「まだ言い合ってるの？」

「だって、あいつから絡んでくるんだからしょうがないじゃん」

想像しやすい画に、莉子は笑う。

「そんなことより、莉子は匠に何かアプローチはしないの？」

「アプローチ？」

「そうだよ、何もしなかったら何も進まないでしょうに」

それは本人が重々に承知している。

ただ、クラスが替わったこともあって、あの公園に行った日から2人はどこか心に距離があった。

「分かった！」

沈んでいた莉子がハッとすると、一音は彼女の肩をつかむ。

「私もするから、右太にアプローチ」

「えっ」

莉子より奥手といえる一音の一大決心、自分と親友を奮い立たせるための。

「そりゃ、もしダメになったらとか考えると怖くてたまないけど、でも、私は頑張る！」

「だから、あんたも頑張りなさい！」

「一音……」

一音は下唇を噛んで、莉子の肩にあつた手に力を入れる。温かかった、そこまでして自分

分を励ましてくれてる彼女の手が。

莉子は一音の手に手を重ねて、笑みを浮かべてコクリとうなずいた。

住宅地を分ける一本道を進んでいくと、左に自宅がある曲がり道を右に折れる。毎朝通

る道だけど、この時間に通るのは1ヶ月ぶりになるだろうか。

目的地に到着すると、自転車から降りて家に入ろうとする匠と鉢合わせになった。こん

な玄関口で会うとは思っておらず、準備がしきれてない心内を落ち着かせる。

「何、どうしたの？」

匠の第一声、莉子はまだ心持ちが定まってなくて返事に迷う。

「それ、どこか行ってたの？」

莉子の第一声、何を言うか決まらず、匠の提げていたスーパーの袋に話題を変える。

「ああ、調味料の買い忘れ」

夕食の準備に掛かったところ、それに気づいて二度手間をしてきた帰りだった。

「そう、ちなみに今日のメニューは？」

「カレーチャーハン」

「あつ、いいなあ。食べたいかも」

さりげなく足してみる、もしかしたらお呼ばれしないかなと。

「ああ、今日は親父がいるから」

「そうなんだ・・・じゃあ、ダメか」

莉子は肩を落とす、そんなうまくいってくれないなど。

「じゃあ」

じゃあと返しそうになったのを留めた、莉子は

「ねえっ」

と玄関の方に体の向きを変えようとしていた匠を呼び止める。

「手紙・・・手紙、書いちゃダメかな？」

「手紙？」

「うん、1年のときに書いてたやつ」

ああ、と匠は莉子の言葉を理解する。

「クラス替わっちゃって、時間割とか違うから前みたいなのは全然書けないんだけど。普通

通に私が書きたいことを書いて、また読んでもらうことはできないかな？」

匠には正直言っていることの意味はよく伝わっていなかった。ただ、目の前の莉子のた

どたどしく羅列していく言葉と訴えかけている切な瞳で、どれだけ真剣に言ってるのかは

伝わった。

「ダメ？」

匠は莉子の瞳を見ていた、こんな必死な瞳で見られてるのは初めてかもしれない。なん

でこんなに切願してるのかは読み取れなかったけれど、返事は決まっていた。

「いいけど、読むぐらいなら」

「ホント？ 読んでくれる？」

うなずくと、莉子は安心して顔をほころばせる。

「ありがとう、じゃあまた書くね」

莉子は「じゃあね」と自転車に乗って走らせる。

勇気を出してよかった、そう心から思った。

ガララララ、玄関扉を開けると鍋の御出汁の匂いがしてきた。

「莉子？ おかえり」

「ただいまっ、これ貰ってくよ」

テーブルにあった肉まんをつかんで、木製の艶のある階段を上がっていく。

自分の部屋に入ると、気焦ったように引き戸を閉めて机に向かう。引き出しから久しぶ

りにモンチッチのプリントされたかわいい便箋とピンクの封筒を取り出すと、息をついて

口先をとがらせながらカラーペンを走らせる。

とよきたかったが、そもそもうまくはいかなかった。最初の1行も書き出せないまま、時

間がただただ過ぎていく。

何を書いたらいいんだろう、それを悩んだまま抜け出せない。これまででは時間割の連絡

事項という主目的がしっかりしていたけれど、これからは莉子のオリジナルの書きたいこ

とを書かないといけない。本当は自分の気持ちを全面に出したよう

な文章にしたいけど、
それだとあまりにも自分勝手になりすぎて匠には引かれてしまうかも
もしれない。

お風呂と夕食をはさんで、書き終えたのは23時だった。その間に
投げ捨てた便箋は数
知れず、頭を抱えて髪をくしゃくしゃにしたのも数知れず。

学校の試験よりもずっと難しかった、だって正解がないのだから。
優劣があるだけで、

この手紙の内容に正解なんかない。だから莉子は何十回と息をつき
ながら書いた、完成品
に満足もいつてない。これを送っていいのかですら迷い、一音に電
話すると案外あっさり
と返された。

「それでいいの、莉子が書いた一生懸命さももってるはずだから」
その言葉でようやく安心できた、不安はいつまでも消えなかった
けれど。

本当にLOVE LETTERを書いているようなドキドキ感に莉
子は苛まれ、胸に手を
当てて加速していく匠への想いを感じた。

すばむ胸に手を当てながら、目の前のCDデッキを再生する。透
明感溢れるピアノ・サ
ウンドに導かれて繊細なイントロが流れていく。くせのある歌声と
静かで穏やかなメロデ
ィー、1つ1つが彼女に響いて。

「たっちゃん、こんばんは。」

読んでくれるということ、またこうやって手紙を書くことにし
ました。

そう粋がったように言うてはみたものの、いざとなると何を書い
ていいやらだけ。

どうしよう、何を書こう、そんなことを考えてる間に時間は過ぎるばかり。

ああでもない、こうでもない、悩んでるうちになんとかテーマに辿り着きました。

こういうのって身近にあるものだったりするでしょ、それがヒントになって。

というわけで、今日は私・北野莉子について書くことに決まりました。

私のことぐらい、長い付き合いなんだから知ってるよって思ったら甘いのだ。

私も知らぬ間に成長してるんだよ、だから匠の知らない私についてをレクチャーします。

まず始めに、この前にやった身体測定。

身長は160cmに到達、体重は40kgちょっと、スリーサイズは内緒。

気持ちばかしのヒントをあげるなら、友達いわく「莉子の体型って理想的、出るところ出

てるし、締まるところ締まってるし」とのこと。

勉強は上の下、得意科目は国語、苦手科目は数学、これはあんまり変わってないね。

数学だけは毎回たっちゃんに負けてるもんね、下の中のくせに。

そうだった、キュウリが食べれるようになったんだよ。

前はサラダとかに乗ってるの、たっちゃんに食べてもらってたよね。

もう大丈夫、漬物だろうが和え物だろうがバンバン出しちゃって。

音楽は洋楽も聴くようになったの、アニメソングを大声で歌って

た頃とは違っただから。

最近は何にラブソングを好んで聴いてます、理由は・・・ヒミツ
ってことで。

今はちょうど、ヴァネッサ・カルトンの「サウザンド・マイル
ズ」が流れてます。

この曲は超好き、CDショップで流れてるの耳にして一目惚れで
買ったかった。

んっ、音楽だから「一目惚れ」って表現は違うか・・・まあ、い
いや。

たっちゃんは知ってるかな？ 最近、映画のCMで流れてるんだ
けど。

知らなかったら、貸してあげるから聴いてみて。

きつとハマっちゃうと思うよ、ただ借りっぱなしはナシだからね。

今日はこのへんにしところかな、長々と書くのもなんだし。

どう？ まだまだ、たっちゃんの知らない私はいろいろあるんだ
よん。

と言いつつ、逆に私の知らないたっちゃんもいろいろあるんだよ
ね。

案外そういうの多い、あなたは私に中々そんなこと話してくんな
いから。

・・・分かるかな、言いたいこと。

強制はしません、「読むだけなら」って言っちゃったし。

でも・・・知りたいなあ。「

翌日の帰り道、匠の家の玄関ポストに1ヶ月以上ぶりの手紙を送
る。読み返す度に最後

の一文を消そうと思ったけど、自分を奮い立たせて、そのまま封を
した。

第4話

「たぐくみいっ！」

「たっちやくんっ！」

翌朝、窓越しに莉子の思いきりの声が響く。

中学生の頃から学校のある日は毎日、彼女の声が彼に届けられる。最初の理由は遅刻が

激増したから、起こしてあげる人間がいなかったせい。さすがにマズイとふんだ莉子が、毎朝家まで起こしに来るようになった。

ただ今にいたっては状況が少し変わる、彼女も自分の意思でここに来ている。彼を起こさないといけない使命感もあるが、ここしか1日で彼と一緒にいられる時間がないからと

というのが1番の割合を占めていた。

「こらっっ、起きろっっ！」

インターホンの連弾、玄関の乱蹴り、いまだ毎朝恒例の平尾匠と北野莉子の間接決闘。

2分10秒、この日は早めに平尾艦隊は沈没する。

玄関を開くと勝者が「おはよう」と言っただけ、敗者も「おはよう」と言っただけ。

勝者はリラックスした弾むような言葉、敗者は寝起きの沈むような言葉で。

匠も毎朝、莉子の「おはよう」「に」「おはよう」「やら」「うん」「やら」で返答してくれるようになった。

少しずつではあるが、2人の関係も近づいていっていた。

シャツ、シャツ、2台の自転車が田園を裂くように伸びる一本道を並んで走る。これまででは匠が前を走り、莉子が後ろを見張るように着いていくのが当たり前になっていたのが、今は対向する車や自転車がなにかぎりは並んで走るようになっていた。

吹きつける春風は緩やかで温かみを帯びて、2人の前から吹き抜けていく。

莉子は春が好きだった、その季節の持つものが自分の恋愛観に似ているから。夏の蒸し暑さでもなく、秋の儂さでもなく、冬の肌寒さでもなく、春の穏やかさ。そんな母なる優しい愛情を捧げてあげたい、母親のいない匠には特に。

あとは彼が心扉をもっと開いてくれればいいのに、莉子はそう息をつく。彼が変に突っかかってしまうところがあるから、こっちも素直になれないところもある。

中学のときからそうだった、匠はつかみどころの難しい性格になってしまった。今の生活になってから、彼のひねくれ加減は一層に強くなった。中学時代にはそれをつかむどころか、離れていく一方になる。

それで、彼を追いかけるように同じ高校に入ることに決めた。本当はもう一つ上の高校を狙えたけど、家から近いという理由にかこつけて今の高校にした。時間をかけて近づいていければいいと思ってたけど、一音から気合を注入されて目が覚めた。このままじゃいけないんだ、弱い気持ちでいたら。もっとスピードを上げないと、

気紛れな匠は捕まえてられない。

「ほい」

信号待ちをしていると、匠は無造作にポケットから紙切れを取り出す。

「なあに、これ？」

そう言っても、彼からの返答はなかった。その違和感のある空気に莉子は理解する、その紙切れにあるのであろうものを。

「書いてくれたの？」

「……誰にも見せんよ」

信号が青になると同時に、匠は自転車を走らせていく。

莉子は紙切れをポケットにしまい、「待ってよっ」と彼の背中を追っていく。

「はいっ、これ」

一音がそう右太に差し出したのは、キレイにラッピングもされた包みだった。

「なに、どうしたの？」

スクールバッグも提げたまま朝一番で4組まで来るなんて、普通の彼女ではない。普通

の彼女なら、荷物も置いて時間が経ってから莉子への用事のついでという意味合いにして

来るはずだ。顔色も健康的な笑顔を浮かべるのが普通だ、なのに今の彼女は目線も逸らし
ぎみで居所のなさそうな感じにしている。

「作ったの、りんごのタルト。せっかくだから4人で分けようと思
って、おすそ分け。」

「おお、ありがとう」

その声音も普通より何音か低いものだった、右太が彼女の心持ち

を察するには充分なくらい。

「家に帰ったら食べるよ、一音の作ったやつなら美味しいんだろうな」
「当たり前じゃない、残したらぶっ飛ばすからね」

精一杯の捨て台詞、そこから離れると教室にいつのまにか来ていた莉子に腕を組まれて外に連れ出された。

「今の、もしかして右太にプレゼント？」

「どうやら莉子は来たばかりで、2人の話の内容までは伝わってなかったようだ。」

「違うよ。お菓子を作ったから4人で分けようと思って、それで莉子に届けようと思った

らいなかったから右太に先に渡してたの」

「っていう、筋書きなんだ？」

「バカ言わないでよ、ほらっ！」

スクールバッグに入っていた、包みを莉子に突き出す。

「これがそうなんだ、何作ったの？」

「りんごタルト」

「おお、右太はりんごが好きだからね」

完全に形勢逆転、毎度一音にあだこうだ言われてきたうっぷんを晴らすようにイジリまくる。

「言ってる意味が分かんないんですけど、もおおっ！」

「アハハハ、かわいいよ、一音ちゃん」

脱力しきった一音は本当に可愛らしかった、いつもの突っ張った彼女とは違うのがまた新鮮に映って。

「じゃんじゃじゃ〜ん」

一通り一音を揺さぶると、莉子は宝地図のように大切そうに紙切

れを見せる。

「何よ、それ」

当然、一音にとつてはそれは紙切れにしか映らない。

「たっちゃんからの返事で、す、また手紙書き出したって言ったでしよ？」

「うそっ、返事ってマジ？」

「返事欲しいみたいなのを間接的に書いたの、そしたらくれたのっ！」

莉子は飛び跳ねるようにあどけない笑顔をする。

「匠のガラじゃないねえ、ゴーストライターとかじゃなくて？」

「ちよっと、怒るよ」

「はいはい、ごめんなさい」

ニヒヒツとニヤついた顔で莉子は紙切れを眺める。

「この前にやった身体測定、眠くてだるかった。

身長は173cm、体重は58kg、スリーサイズなんか聞いても気持ち悪いだけだろ。」

勉強は下の中らしい、得意科目は数学、苦手科目は理科、基本的に全て苦手。

数学だけは毎回勝ってるけど、一つぐらい勝たしてくれ。

食べれるようになったものは特になし、食べれないものに無理にトライする気はない。

一流レストランでも食べたら違っただろうけど、俺には無縁の話。

音楽はロックが大体、NIRVANAは文句なしでアガれるからよく聴いてる。

他には、ガンズとかレッチリとかリンキン・パークとか。

ヴァネッサ・カールトンの「サウザンド・マイルズ」っての、正直知らない。

そんな良いんなら借りてやるから、いつでもどうぞ。」

言葉遣いに問題があるのは大目にみよう。授業内容も必要最小限にしかノートに取らな

いんだから、こうやって誰かに文章を書くなんて滅多にないはずだ。なにより、こうやっ

て返事を書いてくれたことが喜ばしいことなんだから。

「ねえ」

「んっ？」

紙切れにニマニマしていると、一音に現実に呼び戻される。

「それ、見せてくれるとかじゃないの？」

「いや、見せないけど」

「はっ？ それを貰ったつてことだけ言いに連れ出したの？」

「そうだけど、何か問題あった？」

「ちょっと待ってよ、そんなこと言われたら中味が気になるに決まってるでしょ」

ましてや匠が書いたものとなれば、どんな内容かは余計に気になる。

「ダメだよ、誰にも見せないように言われてるんだから」

「いまさら何言ってるの、いいから見せなさいよ」

一音は紙切れを奪おうと、莉子に攻め寄る。

「ヤダっ、これは見せないもん」

なにがなんでも見せない、これだけは。

匠に見せないと言われたからというより、この紙切れを匠と自分の2人だけのものにしたかった。

「はいつ、これ」

「んっ、何これ？」

別に、といった表情で一音は包みを匠へ差し出す。

「りんごのタルト、食べたきゃ食べていいよ」

まるで、愛情のない飼い犬にエサを与えるように言う。

「お前、凝ったもん作るよなあ。タルトなんて、俺の人生で1回食ったことあるかどうかだぞ」

「まあ、そうでしょうね」

気持ちのない言葉、反発し合ってるわけではないけれど通じ合ってもいない。

「でっ、右太に作ってきたわけ？」

「うん」

匠は瞬間止まった、ここは「そんなんじゃないわよ」と否定が入るはずなのに。

「あれあれ、今日はやけに素直じゃない」

「悟ったのよ、あなたと無理に言い合いしたって何の得もないって」

「ふうん、それはそれで寂しいんじゃない？」

「心配御無用、ちっつとも寂しくなんかないから」

一音の虚勢を見透かすように匠は笑みを見せる。

「莉子にも渡したの？」

「全員に作ってたってことにしたからね、一応あなたにも渡しとかないと」

「そっだ、一音は思い出す。」

「あなた、莉子に手紙の返事書いたんだってね」

「……見たんか？」

「見た、こっ恥ずかしいこと書いてんね」

ムフフ、わざと匠の不快に触れるように一音は笑う。

「あのバカ、見せんなって言ったのによお」

書かなきゃよかった、そう後悔する。

「うっそっくん、ホントは見てませっくん」

「ウソ？」

「うん、見せるって言うてんのに「見せない」の一点張りだったよ」「なんだよ、おどかすなよ」

匠が崩れるように言う。

「どついう風の吹き回しよ、らしくないことして」

「知らねえよ、書けみたいに言われたから書いたただだよ」

「何を書いたかは分かんないけど、莉子嬉しそうだったよ」

ふうん、匠は関係ないといった態度で受け流す。

「ねえ、よかつたら莉子にこれから返事書いてあげてよ」

「はあっ？ やだよ、そんなの」

「なんでよ、いいじゃない」

「苦手なんだよ、こついうの」

「でも、それで莉子は笑顔になれるんだよ」

「知らねえ、つて言うてんだろ」

「2行でもいいから、4行でもいいし」

「増えてんじゃねえかよ」

また毎度の流れかと思ったところで、匠の手の甲に一音の手のひらが乗る。

「お願い、あの子ともつと向き合っただけよ」

真つすぐな瞳だった、彼女にそんな瞳で頼まれるのは初めてで違和感すら生じた。

「お願い」

そんなこと言われても、それが匠の本音だった。

「………適度にな」

匠の負けだった、一音といえど女からの頼みごとには弱い。

「絶対だよ、嘘ついたら防具なしで莉子に竹刀で頭打ち抜いてもらっからね」

「脳震盪じゃねえかよ」

そうは言いつつも、匠も少しずつ感じてる部分ではあった。

莉子が正面から向かってこようとしてくれるなら、こつちだっ

て考えないといけない。
ちぐはぐはするだろうけど、何かしら進めていく必要がある。

その日から、匠も1週間に1〜2回ほど返事を書くようになった。といっても、莉子から送られる文章への返事ぐらいで、匠側から話題が出ることはほぼ無かったけれど。

莉子のピンクの封筒に入ったものに対し、匠はノートのはだかの切れ端。莉子のカラフルな便箋とカラーペンに対し、匠は鉛筆で適当に書いたようなもの。莉子が毎夜躍るような心持ちで玄関ポストに入れるのに対し、匠は毎朝「ほらっ」と不躑躅といった感じで渡す。両極端と思えるほど温度の差がみられるのに、そのやり取りは莉子の心を満ち足りたものにさせる。

「たっちゃん、こんばんは。
今日はなんだか涼しい日だったね、気温の変動が多いから体調には気をつけて。」

たっちゃんの体は敏感だから、体の中は真逆なのに・・・プププ。そっだ、一音のりんごタルトはもう食べた？
私はさっき食べたよ、味はいつもいつもものはなまる。
ホントに毎回ハズレがないよね〜、右太は幸せ者だよ。

たっちゃんは食べれるようになったもの、ないのかあ。
そういうの挑戦しないタイプだしね、石橋は叩いてから渡る匠くん。

まあ、食べれなくなっただって日常生活に支障はないから問題はなし。

ヴァネッサ・カールトン、知らないんだね。

そんじゃ、聴いてやる匠くんに貸してやるとするか。

ロックバカのたっちゃんにこの繊細さが伝わるかは微妙なところですが。」

「一音のりんごタルト、夕食のときに食った。

甘ったるいけど、美味しいは美味しかった。

たまには甘いものもいいなと思った、あいつの性格もこんぐらい甘くなればなとも。

ヴァネッサ・カールトン、聴いた。

良かった、こういうのも結構好きだから。

ロックを聴いてる分、逆にこういうのも聴きたくなったりするし。当分は借りとくわ、返さなかったらごめんな。」

「たっちゃん、こんばんは。

って、借りたもんは返さなきゃダメでしょうが！

昔っからそういうところ緩いよね、被害を受ける方の身になってみなさい。

CDがなくなった、ゴムボールを林の中に入れちゃった、ヘッドフォンを泥水に落とし

た、数え出したらキリがない。

第一、どうやってたらヘッドフォンを泥水に落とすっていうの？

逆に、ものすごく器用な人なんじゃ、って思いたくなっちゃったよ。

ゲームソフトなんか、私が貸したやつを他の人に貸して返ってこなかったでしょ。

他の人に貸すんなら、「貸していい？」の一つくらい言いなさい。あっ、説教じみちゃってる・・・あんま長いと嫌がられそうだから

ら、このへんで。

仕返しの先取りってゆうんじゃないけど、今日一音から叱られたでしょ？

バレちゃってると思うけど、たっちゃんの言ったこと一音に言っちゃいましたっ。

そう、「あいつの性格もこんぐらい甘くなればいい」ってところ違うの、「美味しいは美味しかった」ってのを伝えようと思ったら口が思わず……。

私の口は案外すべりやすいようです、ナハハハハ、こうなったら開き直りなのだ。

冗談半分で言ったつもりなんだけど、彼女には冗談が通じなかったよ。

こと平尾匠に関しては、彼女は冗談を本気と感じ取るらしいです。勉強になりましたね、ウンウン。

……っていうか、ごめんなさい。」

「別にいいよ、あいつに怒られるのは慣れてるから。

面白いくらいだし、「私がいつ怒ったっていうのよ！」「って怒ってるんだから。

右太も大変なこった、これは言うなよ。

この前、水泳の授業でプールにいたの教室から見えた。

窓側の席だし、授業にも集中できなかったからボウツとしてて。友達とやらの言ってたやつ、お前のスタイルが理想的だったの。

遠目からだからよく分かんなかったけど、まあまあってとこだな。

「たっちゃん、こんばんは。

って、授業中に何を見てんの！

人の水着姿なんて見てないで、授業に集中しなさい！
それに、まあまあとか大きなお世話だよ！

一音のは言っていないよ、心配性だなあ・・・誰のせいだ、って聞こえてきそうだけど。

滑り止めの薬を口に塗っておいたから、もう大丈夫。

一音はああだこうだ言うけれど、私はちゃんと知ってるよ。

たっちゃんも私たちが持っていないものをたくさん持ってるって。

一つ挙げるんなら、やっぱり家事かな。

その年齢で一軒家の家事を毎日こなしてるんだから拍手です。

学校が終わったら、スーパ―に寄って、大きい袋を提げて帰宅。

家に帰ったら、洗濯、掃除、料理、女の子みたいに献身的にこなして。

あぐらかいて家計簿つけてるのも知ってるよ、多分数学好きはこういふところにも表れてるんだらうね。

簡単にまとめてゴメンだけど、私はたっちゃんのこと分かってるから。

・・・そう、三度の飯よりエッチなことが大好きな変態くんってこともね。

さてさて、気分転換に今日は私しか知らないたっちゃんについて話してみましよう。

小学生のたっちゃん、一目散のことを「イチモクさん」と勘違い。アニメを見てるときに「一目散に逃げた」ってナレーションがあったとき、「イチモクさ

んって誰？」と聞いたのを覚えてるでしょうか。

私はあなたの言ってる意味が分かりませんでした、今も分かりたくはありません。

中学生のたっちゃん、初ナンパが散々な結果に終わる。

クラスの友達5人ぐらいで夏のビーチにくり出したとき、片っぱしから見た目のいい大

人の女の人に声を掛けていって全敗に散ったのを覚えてるでしょうか。

覚えてるでしょうね、っていうか絶対に無理だつて。

中坊の男の子に本気になってくれる女の人なんて、いないない。タイトルは「あわよくばツアー」だったっけ、張り切ってる分だけ悲しくなるよ。

高望みなんてするもんじゃないね、身の程を知りなさい。

高校生のたっちゃん、「一杯つきあって」に対して本当に一杯で帰る。

お正月に親戚一同が集まった席で大人の席に無礼講とたっちゃんも出席、ただ酔っつてい

く大人たちに引いてしまったため、「一杯つきあってよ」と言われたのに本当にビール一杯

で子供たちのいる別室に移動したのを・・・覚えてるよね、まあ。

がっしかし、普通「一杯つきあってよ」の一杯は一杯ではないわけです。

サラリーマンが上司に「一杯つきあって」と誘われ、一杯で帰ったら間違いなく怒られるわけ。

とは言いつつ、これに関してはたっちゃんが正解だと思います。

私もああいう席の大人の騒ぎっぷり、勘弁だから。

お年玉だけ貰ったら、逃げるように子供たちの席に行きます。

飲んだくれに愛想ふりまくより、従兄弟や甥っ子や姪っ子とたわむれる方が数倍楽しい。

意外なたっちゃんの弱点、玉子が食べれないこと。

苦手の理由は「意味が分からない」、私からすれば匠の言ってる意味が分からない。

あんな美味しいのに、私の人生の中でも玉子が食べれないのはあなただけです。

ケーキとか、分からないようになってればいいんだけどね。

玉子料理が全滅っただけで、ずいぶん多くの料理を楽しめない現実。

オムライスは中味だけ、っていうかケチャップライス。

ハンバーグに目玉焼きも乗せられない、あんなベストマッチを。

親子丼、カツ丼、ロコモコ、かに玉、茶碗蒸し、おでん・・・拳げだせばキリがない卵

料理。

食べれるようになったほうがいいよ、と言っても聞かないのではありません。

それはたっちゃんの中の忌まわしい過去、ウィズ私。

小学生のときに玉子豆腐をまだ知らなかった匠少年に「これ、玉子入ってるけど美味し

いよ」と食べさせてしまった莉子少女。

結果、吐いてしまった匠少年・・・ホントにごめんなさい。

たっちゃんの玉子嫌いに、私もちょっと加担してると思うと心苦しいです。

案外イケるもんだろうと思った浅はかな私の考えです、騙されたと思って食べて騙された匠少年。

ああ、可哀相な平尾匠くん・・・でも、さすがに変わってあげたくはありません。

私のことを恨んじゃダメだよ、恨むのは自分の味覚にしなさい。

本人も目にしない癖、寝てるときに最低2回は寝返りをうつ。

伝えてはあるので知ってはいるけれど、本人は目にすることができない行動。

小さい頃はお互いの家に泊まったりしてたでしょ、月に1回ぐら
いだっけ。

子供部屋で2人で寝てる時、たっちゃんをよく寝返りをうつて
ました。

寝苦しいんでしょうか、まさか霊的なものとか……。

ひゅ〜、どろろろろろ……今日、たっちゃんは寝るときに怖く
なる。」

莉子が思うような速度ではなかったが、確実に2人は距離を縮め
ていく。

思春期に離れていった距離を1つ1つ確かめながら紡いでいき、
季節は夏を迎えた。

紡がれていった2人の距離は、ここで大きく変わることになる。

1学期の終業式、刺さるような射光を浴びながら雪崩れるように
教室まで辿り着く。

自分の席が日陰になっていたのは好運だった、いくらか冷えてる
机に顔をなするように

して涼む。机の中も有効に使う、手をそこに付けて冷やしていると
カサカサと触れる音が
あった。

取り出すと、それは白の封筒に入った手紙だった。匠はすぐに莉
子の顔が浮かぶ、ただ

それにしてもシチュエーションも封筒の色も違う。疑問符をともし
ながら封を開くと、周

りにバレないように中味を見た。

「終業式が終わったら英会話室に来てください 間村小鳥」

その名前を目にすると、本人の方へ視線を向けた。彼女は友人たちと談笑している、こつちを気にしている様子は見られない。

逆に匠の方が彼女を気になってしまっ、終業式の間も何度か視線を向けていた。

式が終わると、手紙に書かれていたとおりに英会話室に匠は行った。扉を開けると彼女

はすでにそこにいて、こちらを見たり見なかったりを繰り返す。

「ごめんね、呼び出したりして」

「いや、いいけど」

そこから喉が詰まったように、言葉が止まった。匠の側から言い出すことはなかったし、急かすこともしなかった。

「あのお・・・」

目の前の間村小鳥が緊張してるのは簡単に察することができた。

視線を合わせた合

せなかったり、不定な間隔で息をついている。

なにか手の込んだイタズラなのかと踏んでいたのに違っていた。

傍から誰かが2人を見

ていて自分の反応を面白がってるのだろう、というドッキリではなかった。

それに気づいた途端、匠も急に体が引き締まっていく。

夏休みに入ったばかりの学校は、それまでに比べると異質な雰囲気になる。校庭や体育

館、プールや柔道場や剣道場では朝から活気があふれている。野球部やサッカー部の張つ

た声や撒き上がる砂埃、バレー部やバスケット部の上靴が床と擦れる音やボールの弾む音、水

泳部のスタートとともに飛び込む音や舞い散る水しぶき、柔道部の威勢のよく畳に投げつける音、剣道部のしなる竹刀で打ち抜く音。それぞれが青春の場面で音で流れていく、対称的に誰もいない無音の教室には哀愁すら感じる。

「北野、ちよつといい？」

部活終わりに防具を片づけていると、莉子は先輩に呼ばれる。なんだろうと後を着いて

いくと、誰の姿もない剣道場の裏だった。やかましいくらいにセミの鳴き声がする、練習

中の剣道場にもBGMのように響くほど。

「どうしたんですか、先輩」

莉子から話し出すと、先輩は爽やかな顔をしていた。

「北野、実は……」

あらたまつたように顔色を変えた先輩に、莉子も何かを感じ取った。

公園を入ったすぐ右手には、ハウセンカの花々が鮮やかな赤色を放っていた。

レンガが敷き詰められて出来たいびつな道の先へ行くと、左右への選択権をせまる分岐

点を匠は右の道を選ぶ、それに続いて莉子も右へ曲がる。

左右の道に挟まれるように広がる緑の草地では、子供たちが何をするとということでもな

いのにキヤアキヤアはしゃいでる。それを見守るように、大人たちも近くのベンチで世間

話でも話している。

切り絵で描くハサミの切り取り線みたいにく曲がりくねった道を歩いていると、段々

畑のように連なっている雲の間からさしこむ日差しが体に直にあたる。

この日の気温は28、もうじき梅雨が明ければ夏も本番になるだろう。夕暮れに差し掛かる時間帯になり、セミの鳴く声もあちらこちらから聞こえてくる。今までの時間、家

の中でクーラーのある世界に慣れていた匠の体は違和感を憶える。それに対し、部活で稽

古をしていた莉子も運動で発汗作用がよくなっていたようだ。Tシャツにジーンズを着ていた匠も、制服を着ていた莉子も汗がじわじわと滲んでくる。

白や灰色、ところどころの黒という色合いの連なっていく砂利道を歩き出して10分ほどになると、入口で左右に分かれていた2つの道が繋がる砂利道の終着点、公園の奥行きも最後をむかえる。

その砂利道を抜け、ガサガサと行く手をさえぎるように木々が横一列にそびえている草地に足を踏み入れていく。目の前の木々の隙間をかいくぐりながら先を行くと、その先の別世界が今日も2人を待っていた。

一面の緑地、そこを貫流していく野川、川を挟むように伸びている紅葉の木々。心を動かされるような、自然に彩られた景色が目の前に広がっている。

歩を進ませていくと、野川に差し掛かる傾斜に2人で座った。

夕暮れになって和らぐ射光、透き通る野川のせせらぎ、緑々と生い茂る草木。この季節が1番その匂いを感じられる、それぞれが大きな力を発して生の力を強くさせている。艶

が見やれるぐらいの自然に心を清らかに洗ってもらい、新たな心持

ちにさせてもらえた。

「あのさあ」

2分ほどの沈黙の後、ほぼ同時に言がなされる。

どうぞ、どうぞ、決め事のようにお互いに譲り合ってから莉子が口を開く。

「今度、剣道の県大会があるの。来週の土曜日と日曜日なんだけど、私は個人も団体も出

ることになってて。そのお・・・要は、観に来てくれないかなあつてことなんだけど」

匠は少し悩む様子を見せ、

「いいけど」

と答えた。

その答えに、莉子は表情をやわらげる。

「よかった、ありがとうね」

「いや、別に」

その表情の柔らかさの分だけ、匠は胸を痛める。

「でっ、そっちは?」

「んっ?」

「たっちゃんのだよ、なんか言うことあったんでしょ?」

「いや・・・特にないけど」

匠は決まりの悪そうな顔を浮かべている。

「なあに、ちゃんとやってよ」

「何でもない、ただ腹が減っただけだから」

「もう? まだ来たばかりじゃんか」

「いいよ、帰りがけに何か食べれば」

そう言うつと、匠は傾斜に寝転がって目をつむってしまった。

なあんだ、莉子もそう息をついて寝転がる。

それから1時間、匠が目覚ますまで莉子はその顔を見ていた。

そこにいるだけで、そ

ばにいたるだけで、温もりに触れられてる気がした。何を言うわけじ

やなく、何をするわけ
じゃなく、横にいただけで自然に顔が微笑んでる自分にも気づいて
いた。

第5話

気持ちのいい晴れ晴れとした青空、うざったいぐらいの蒸し暑さ。ケチのつけどころのない快晴になったが、剣道日和とは間違っても言えない。

うだるように熱を帯びる中、北野莉子は県大会の当日を迎えていた。

熱の波動すら見えそうな会場で、完全防具を装着しての試合。一般人がやれば数分でお手上げだが、これまでの長い経験がある莉子には慣れっこといえたむしろ、「試合はこう

でなくっちゃ」と当然のような環境だ。この熱気がパワーの源となり、自分自身の体の中にある熱になってくれるほど。

「えやあつ！」

その掛け声とともに、莉子是对する相手を次々に倒していった。

年下に同学年に年上、構うことなく剣は正確に捉えていく。県下何位という腕前にふさわしい剣さばきで、彼女は着実に勝ちあがった。

「莉子ちゃん、いいねえ。このまま、いくとこまでいくんじゃない？」

「そんな簡単じゃないって、ちょっとでも油断したらやられちゃうよ」

午前の部が終了し、午後の部までの休憩時間に待井一音と林部右太と合流した。

一音の作ってきてくれたお弁当を囲みながら、束の間の休息に心

を落ち着ける。

「にしても、匠からはまだ連絡ないの？」

「ないねえ、あいつはありとあらゆる欲に弱い子だから」

この日も当たり前かのように、匠は睡眠欲に負けていた。

「ったくさあ、一応こっちは4人分でお弁当を作ってきてんのに。そりゃ、匠が寝坊する

ぐらい計算済みだけど、念のために作ってあげてるってのに」

「大丈夫だよ、右太が2人分食べてくれるから」

「俺？ 俺はあんまりバカ食いする方じゃないんだけどな」

「だって、私はこれから試合あるから食べすぎれないし。だからって、作った本人に2人

分も食べさせるっていうの？」

「はいはい、食べさせてもらいますよ」

そう言われちゃおしまいだ、右太はあきらめがつく。

会場に流れたアナウンスで、莉子は次の試合の準備へ向かう。

体育館に降りようと一旦外に出たとき、視界に入ったのは匠の姿だった。寝癖がついた

ままの髪に、何も考えず近くにあったものを取ったような雑な服装。夏休みで完全にオフ

モードに入った学生を画にしたら、きつとこんな感じになるのだろう。

思わぬところで偶然に会ってしまったせいか、なんだか気まずいぐらいの空気が流れる。

「たっちゃん、来てくれたんだ」

「ああ・・・行くなって言っただし」

少し空いてしまう間を埋めてくれたのは、ミンミンうるさいセミの声。

「しっかし、暑っちいよな」

おそらく自転車でここまで来たであろう匠は、顔からまだ汗が出

ていた。

「そうだね、見るからに暑そうだし」

「お前、あんな防具なんか着けて暑くないの？」

「暑いに決まってるんじゃない。でも、動いてると案外気持ちいいもんだよ」

そう、匠は言いながら流れる汗をシャツの袖で拭く。

「まだ勝ち残ってんだろ？」

「うん、これからベスト16」

「そうか、まだ残ってんならいいか」

遅刻したって、隠れていた言葉を莉子も読み取る。

「でもね、一音は「せっかく4人分のお弁当を作ってきたのに」「って怒ってたよ」

「マジ？ やべえな、おい」

「今ならまだ余ってるかもしんないから行った方がいいよ」

ああ、そう言って匠は振り向こうとする。それを途中でやめると、また元に向き直して

言った。

「………頑張れよ」

視線はずらしていた、それでも莉子の心には届いた。

「うん、頑張るよ」

そう2人は別れた、莉子は匠の言葉を体の中に押し込めるように胸に手を当てていた。

ベスト16の相手は1年生、彼女に対して2年生の莉子が昨年に勝ち上がっていた様を

思い浮かべることもできた。昨年の自分は全力で向かっていくだけだった、言葉は悪いが

「やけっぱち」というぐらいに。

ただ今の自分は違う、その相手に負けるわけにはいかなかった。ここで負けたら、昨年

の自分自身に負けてしまうような気がするから。

「えやあっ!」

試合時間は3分16秒、瞬間技で取った小手、会心の胴での2本先取。

安堵の息をもらす、最低限といえる位置まで来ることができて。

昨年と同じベスト8入

り、なんとしてでも勝ち残らないといけないところまでは来れた。

準々決勝の相手は2年生、同学年となれば余計に負けるわけにはいかない。

昨年は3年生に負けた、1年生の莉子には実力者の2つ上は敵わない相手だった。ただ
同じ年なら負ける気はさらさらしない、勝つことしか頭に浮かべれないぐらい。

鬼門となる試合にも不思議と緊張感はさほどしかなかった、彼女はプレッシャーを力に変えられるタイプだったから。

試合時間が迫ると、莉子は胸のあたりにそつと手を乗せる。

「……頑張れよ」

さつき匠から貰った言葉を心内で唱える、精神が和らいだ。

「えやあっ!」

試合時間は5分いっぱい、気合いで取った面1本での勝利だった。試合場を後にすると、集中から解き放たれて嬉しさが込み上げてきた。念願のベスト4

入り、目標にしていた位置まで来ることができた。

「すごいねえ、莉子」

2階の応援席から試合を見ていた一音は零れるように言う。

「もしかしたら、このまま勝ってっちゃうんじゃない?」

昼食のときの一音の言葉は現実味がなかったが、今の右太の言葉にはリアリティを感じ

れた。

「おいさん、どう思うよ」

ただ下を眺めてるだけの匠に聞く。

「さあ、相手の強さ次第じゃない？」

「なんだよ、ずいぶん乾いた答えだな」

知るか、そう言いたげに匠は視線を下に向ける。

準決勝の相手は3年生、さすがに年上となると萎縮する部分は少なくもある。学生生活

の部活なんて縦社会のようなもので、たとえ実力主義といえど年功序列が主とされるのは

確かだ。その中で生活をしている莉子には、年上というだけで引いてしまうところは自然とあった。

それでも負けられない、ここに勝てば自動的に全国大会への切符が約束されているから。

さすがに彼女にも緊張が芽生えてく、全国の夢の舞台に手を掛ける試合に臨む状況に。

なのに不思議だ、胸の内が高鳴りとともに躍っていくのも感じれて。

フツと莉子は後ろを振り返る、上を見上げると匠と一音と右太の姿が見えた。

莉子の様子に気づくと、一音と右太は

「頑張れ」

と手を振って応じてくれた。

匠は隣の一音に肩をたたかれて、仕方なしといったようにグツと握り拳を見せる。いつ

もと変わらない仲間、初めて大会を見に来てくれた恋先。

莉子はニヒヒツツと笑いながら面をかぶって、意気揚々と試合に挑んだ。自分でもよく分

からないパワーがみなぎるのを感じれる、こんなことは初めてだ。

「えやあっ！」

試合時間は7分22秒、相手の面が入った後、莉子のフェイクからの面が入り、延長戦

で接近戦からの莉子の抜きの小手が決まった。

自分が信じられなかった、面の中では見開いた瞳と開いた口が隠れている。

試合場を降りると、外した面をギュツと抱きしめて喜びをかみしめた。

全国大会、自分になんか夢のまた夢だと思ってたのに。中学時代から地元では指折りと

いえたけれど、県レベルになれば小粒でしかなかった。そんな自分が全国に行けるなんて、

そう夢心地になって莉子は愛用のぬいぐるみのように面を強く抱きしめる。

「おめでとう、北野さん」

「あつ、はい、ありがとうございます」

声を掛けられ、莉子はようやく現実に戻る。

「僕もさつき準決勝に勝って、全国決めたんだ」

「ホントですか？ おめでとうございます！」

「うん、ありがとう」

先輩も全国大会行きを決めていた。莉子にはそれを心から祝福することができた、今の

彼女はそれがどれだけ嬉しいことか分かるから。

「北野さんはすごいね、2年生で全国行っちゃうなんて。僕も今年が初めてなのに、大したもんだよ」

「いえいえ、私はまぐれですから」

「そんなことないよ、北野さんが努力してるのは分かってるから。」

「じゃあ、この後の決勝

も頑張つてね」

「はい、先輩も頑張ってください」

手を振りながら離れていく2人を、上から仲間が見ていた。

「あれって、誰？」

「おやあ、匠も気になつちやつたかな」

「うつせえ、そんなんじゃないし」

気になったのは気になった、莉子が仲間内以外の男と親しげにしているのは。

「あれは剣道部の主将の見渡当真先輩、ルックスもよくて下級生から人気あんのよ」

「へえ」

「もち実力も折り紙つき、さっき先輩も決勝に勝ちあがってたし」

「ふうん」

男の試合なんて気にしてなかったので、一音の言葉は全てが初耳だった。

言おうか言うまいか、悩んだ結果に一音は真実を今は黙っておくことに決めた。

決勝の相手は3年生、莉子も顔と名前が一致するほど県下では有名な選手だった。

まるで有名人に街で遭遇したしまったような雰囲気になる。駆け出しのアイドルが大物

芸能人とマンツーマンでトークするような。

最初から吞まれては負けだ、そう自分に言い聞かせる。

せつかく匠が見に来てくれるのに、無様なところだけは見せられない。

「えやあつ！」

試合時間は3分44秒、相手の面と胸が入つての2本先取。完敗だった、気持ちでも技術でも相手が勝っていた。

そのまま男子の決勝を見学した、見渡も決勝で惜しくも負けてしまった。ただ自分のと

は違う、拮抗した力での試合だった。

「八八、格好悪いところ見せちゃったかな」

「そんなことないです、すごかったですよ」

試合を終えた見渡を莉子が出迎える。

「いやあ、ビシツときめて全国にいきたかったんだけどね」

「いえ、どっちが勝ってもおかしくない試合でした」

「北野さんも残念だったね」

「私は全然です、本当に全国なんてまぐれみたいなもんです」

「そんなこと言わない、実力で勝ち取ったんだから」

見渡の言葉に、莉子は恐縮と笑みをこぼす。

「莉子ちゃん、ホントにあんたは友達として誇り高いよお」

着替えを終えて2階に上がると、いきなり一音に抱きしめられる。

「そんなことないよ、たまたまだから、たまたま」

「いいんじゃない？ たまたまでも全国に行けたら万々歳ってもん

な」

そうだね、右太からの言葉に莉子もそう笑みを見せる。

「おいさんも何かお祝いの言葉の一つでも言つてやんなよ」

帰り道、4台の自転車がバラバラに走る中で右太から言われる。

匠は何を言ったらいいか悩む、それを察するように莉子が言う。

「いいよ、どうせ優勝できなかったんだから」

自分自身をすばませるような言葉で納得させるつもりで。

「………そんなことねえんじゃない、俺よく分かんねえけど。

全国行けるなんて結構

すごいんだろ？ だったら、素直に喜んでいいと思うけど」

やっぱり匠だと思った、自分が沈みそうなときには引き上げてくれる。

「そうかなあ？」

「そつだろつよ」

「そうかなあ!?!」

「おおっ!」

「そうかなあ!?!?」

「おおよっ!」

力いっぱい張り上げた声のやり取りに、2人ともアハハと大笑いする。2人でこんな笑

い合ったのは久しぶりだ、それを後ろから見ている一音と右太も笑っていた。

「ありがとうね、今日は来てくれて」

「いや、良いもん見せてもらったから」

一音と右太と別れた後、莉子は匠の家にお呼ばれになった。匠の家まで自転車で着き、

帰ろうとすると声を掛けられる。

「せっかくだから、上がっていけば」

「えっ?」

「お祝い代わりに、夕食作ってやるから」

「ホントに?」

「そちらさんの剣道に見合うような料理の腕前は持ち合わせてませんけど」

「ううん、ごちそうになります!」

彼からお祝いなんかあると思ってなかったから、思いのほかに驚いた。匠の方から自主

的にごちそうしてくれるなんて、いつぶりだろうか。

「リクエストはありますか?」

「そう言われ、迷うことなく答える。

「ミートソーススパゲティ」

「また? 別に他のでもいいんだけど」

「いいの、私はそれが」

はいはい、匠はそう台所に向かう。

莉子は自然と顔がほころぶ、彼の後ろ姿を見ながら。構わずに料理を続ける匠の後ろで

莉子は喜びの灯火をともした。

「いただきま〜す」

出来上がったミートスパゲティとサラダを2人で食べる。サラダにはちゃんとキュウリ

が入っていた、莉子の手紙を覚えててくれたようだ。

2人の関係はどう見ても順調だった、傍からすれば一目瞭然といえる。

ただその優しさには、相手への必要以上の気遣いが備わっていた。もう、裏では大きく

展開は変わりだしているのが現状だった。

夏休みも中盤に差し掛かり、8月の空に浮かぶ太陽はこれでもかと大地に光を浴びせていた。

体育館でバスケット部の練習に参加していた一音は、

「ねえ、誰か呼んでるよ」

と言われて出入り口に立っている人影の方へ向かっていく。

「どうしたのよ」

「うつす」

意外な来客に、一音は何事だろうと思う。

「なんで学校にいんの？」

「追試の答案を受け取りに来た」

匠は1学期末のテストで赤点を出し、先日受けた追試の結果のために学校に来ていた。

赤点を出したとき、目の前の一音が

「うつわ、ダサッ！」

と顔をゆがませて言ったのは今でもすぐ思い浮かべられる。

「そんで、どうだったの？」

「パスしたに決まってるんだろ、そう何回も落ちるかよ」

「よかったじゃん、っていうか赤点取るのがあり得ないんだけど」

というか、もし落ちていたら体育館になんか来てやしない。そんなもの、わざわざ一音

に笑われに来るようなものだ。

「でっ、何か用？」

ああ、その言葉で逸れていた話題を元に戻す。

「お前さ、何か莉子から聞いたりしてない？」

「はっ、どういうこと？」

回りくどい言い方に、話の真意が全くつかめない。

「右太がさ、何日か前あいつが男と楽しそうに話してんのを見たって」

それで一音には分かった、彼女のところにも右太から電話がきていたから。

「さあ、っていうか男と楽しそうに話すぐらい普通にあるでしょ」

なんとかごまかそうとする、右太にもそう諭した。

「でもさ、右太がいろいろリサーチかけたみたいで。剣道部のやつから、最近あいつと部長が結構仲良いつてウワサが立ってるらしいんだよ」

あんのバカ、一音は心の中で右太に「よけいなこと」と叫ぶ。

「お前なら、なにか知ってたりするんじゃないかなって思ってた」

「なによ、だから普通に話すくらいあるって言ってんじゃない」

また一音はごまかそうとした、それに胸の内が少し痛む。

「そうか、そうだよな」

分かった、そう言う工匠はその場を離れようとする。

一音はどうしようか悩んだ、言うのか、言うまいか。言ったら二人の関係にヒビが入らないだろうか。

でも、言ったことで匠に発破をかけることもできるし。ウワサが立ってるってことはいずれ匠の耳にも届くだろうし、そこまでウワサが大きく
なっただけじゃ逆に事がややこしくなるかもしれない。
「ねえっ」

帰ろうとする匠を呼び止めると、一音は全てを話すことにした。

校舎の奥の方の一目につかないところまで行き、真実を話し出す。

「莉子ね、さっきも言ってた見渡先輩から告白されたの」

「……マジ？」

「コクッ、一音はうなずく。」

「夏休み入ってからだから最近なんだけど、付き合ってたほしって
言われて」

「……でっ？」

「考えさせてください、ってその場では返事しなかつたみたい」

「……そう」

初めて聞く話だった、彼女からの手紙にそんなことは一切書かれ
てなかったし。

「この前の剣道の県大会のとき、2人で仲良さげに話してたりした
じゃん。なんか楽しそ

うな感じだったし、断る理由はないのかなあって思う」

「ああ、そう素っ気なく答える匠に一音は不満を覚える。」

「でも断る理由があればいいんだよ、誰か別の男がいるとか」

その「誰か」という漠然とした言葉が特定の人間を差しているの
は、言われた側にも感

じれた。

「なんだよ」

「なんだよ、じゃないでしょ。莉子、他の男に取られていいの？」

「知らねえよ、なんで俺が出てくるんだよ」

こいつ、この期に及んでまだしらばっくれる気が。

「今じゃんか、今言わないで一体いつ言うつてのよ」

「はっ？ 言ってる意味が全然分かんないんですけど」

信じられない、開いた口がふさがらなかった。匠にムカつくのは年中だったけど、さすがに今回は呆れてものも言えない。

「莉子が見渡先輩と付き合ってもいいの？」

「……まあ、本人がそうしたいなら、そうすればいいんじゃないの」

バシツ、匠の言葉を聞いた瞬間に一音は手が出ていた。

「あんた、最低だよ」

低い声だった、上っ面の言葉じゃないのはすぐに分かった。

「今まで最悪だとか言ってきたけど、今度という今度は見損なっちゃよ。あんたみたいなの

に莉子の近くにいてもらいたくない」

一音は瞳を潤ませたまま、その場を走り去っていく。

痛みはさほど気にならなかった、それよりも匠は心が痛んでいた。いつもなら必ず言い

返していたはずのところなのに、何も言葉が出なかった。

「どうしたの、すごい剣幕で」

「いいから、こっち来て！」

一音は剣道場で練習に励んでいた莉子を訪れる。

「なに、何があったの？」

「もおおっ、あいつムカつく！」

一音の怒りの理由が分からない莉子には、なにがなんだかさっぱりだった。

「落ち着いて、聞いてあげるから」

「莉子、あんなやつ絶対やめな！」

「はっ？ なにがよ」

「もお、今回こそは許さないんだから！」

頭の整理がついてないため、なんとか話せるまで一音をなだめる。

「一音、ちゃんと1から話して」

「匠よ、あいつは莉子のことなんか何も考えちゃいないんだから！」
余計に分からなくなる、どうして一音は匠のことでこんな怒ってるんだろ。彼女が匠

にムカついているシーンは幾度となく目にしてきたけど、今にかぎってはそれとは明らかに違う。

「たっちゃんがどうしたの？」

そう聞くと、一音も深く息をついて自分を落ち着けて先刻の一部始終を伝えた。

「たっちゃんが・・・そう言ったの？」

「そうよ、白を切るにも度を越えてるのよ」

「・・・そう」

耳を疑いたかった、いくら匠でもそれは信じがたかった。

「あんなのと一緒になくても幸せになれないよ、莉子も目を覚ましな」

「・・・ありがとう、教えてくれて」

莉子は笑みを見せる、いやに焦点の定まっていな笑顔だった。

昼休憩の時間になっても、一音の怒りはおさまらなかつた。

校舎の屋上で右太と昼食を食べているときでも、無性にイライラしてくる。せつかく早

起きして作った2人分のお弁当なのに、味も半減だ。

夏休みは教室で昼食を摂らなくてもいいので、これはチャンスだと一音は勇気を出して

右太を誘うことに成功した。

屋上にはカップルが集まることが多く、彼女には念願といえるシーンの実現だった。そ

れなのに、今日にかぎっては嬉しさに勝る感情が自分の中につごめ

く。

「あいつ、バカだな」

「でしょ？ 信じられないよ、もう」

隣にいる右太にも先刻の一部始終を伝え、彼もまた匠の対応に失望する。

「何のために、俺がわざわざリサーチかけたと思ってんだよ」

もちろん、莉子と見渡がくつつくのを事前に防ぐためだ。2人の関係を防ぐため、匠が

莉子に想いを伝えることを信じて。

「私もだよ。2人のために思って、匠に全部言っただっていうのにさ」
莉子と見渡のことを言えば、さすがに危機感を抱いて重い腰をあげると思ったのに。

それどころか、あっさり莉子のことを遠ざけるなんてどうかしてる。

「匠が「好きだ」って言って、莉子が「私も」って言うだけじゃん。それで全てがうまく

いくのに、なんで出来ないのかなあ。莉子はさ、頑張って剣道の試合に誘ったり、手紙を

届けたりしてるんだよ。匠だって、少しくらい勇氣出せっていうのに」

「……このままじゃ、あの2人まずいことになるぞ」

右太の危惧は正解だった、一音だって分かっている。ただ彼らにやれることには限界が

ある、それを充分なくらいやったはずなのに。

もう祈るしかなかった、あとは本人同士がうまくやってくれるように。

莉子はその日の帰り道、匠の家のインターホンを鳴らした。

毎日ここには必ず寄って玄関ポストに手紙を入れていくのだが、

今日は直接話をするこ

とに決めた。

「たっちゃん、今いい？」

「……ああ」

会話はぎこちなかった、前に踏み込みたいのに後ずさりしてしまう妙な心内で。

「今日ね、一音が私のところに来たの」

匠は目をつむる、この展開はもちろん優に予想できたことだが。

「一音から聞いたんでしょ？ 私が先輩に告白されたこと」

「ああ」

莉子は少し悩む、普段の明るい自分を見せようか、会話に合った探りを入れるような自分でいようか。

「まったく、モテるとつらいよね。どうしよっかな、なんて」

前者を取った、極力の笑顔を見せようとする。

「正直なところ悩んでるんだよね。先輩は人気もあるし、人柄もいいし、私じゃもったいないのかなってぐらいで」

匠はただ聞いていた、視線は合わせたり合わせなかったりする。

「たっちゃん、どうしたらいいと思う？」

思いきって聞く、莉子は心内をグツと構える。

「……一音に聞いたんだろ？」

匠も探るように返す。

「ああ、自分で決めればいいじゃん、ってことだっけ？ でもさあ、せつかくだから客観

的な意見も聞いてみたいんだよね」

「なら、俺じゃなくて右太の方がいいんじゃないの？」

お互いの本音を探り合う、その言葉をお互いにはぐらかしていく。「そりゃそうなんだけどさ、たっちゃんは私のことをよく分かっているじゃん。だから、た

っちゃんの見の方が的を得てるんじゃないかなあって」

この展開も予想できていた、こうなるのならと匠は考えていた。

「いいんじゃない？ そんな良い人なら付き合ってみた方が」
「えっ？」

思わず匠の方を見た、彼の言ってることが分からなくて。
「いろいろ聞いてるかぎりだと断る理由なんかないじゃん、付き合
ってみれば？」

莉子は唇の内側の方をグツとかむ、「本気で言ってるの？」と言
いそうになったのをおさ
えるために。

「俺は俺で、ちゃんとやってっし」

「えっ？」

鼓動が早まっている、経験ないような歪な間隔と強さで。

「実はさ、終業式の日にも俺も告白されちゃったんだよね」

「へっ？」

漏れるように呟く、もう莉子は自分の心内をコントロールできな
くなくなってた。

「同じクラスの子なんだけど、好きって言うてくれて。最初はど
うしようかって考えたん

だけど、そう言うてくれるんらうって思って。お前と同じだよ、
断る理由なんかないか

ら付き合うことになった」

「もう・・・付き合ってるの？」

「ああ。だからさ、お前もその先輩と付き合ってみれば？」

それ、本気なの？

「・・・そっか、そうだね」

どうしてよ、どうしてそんなこと言うの？

「たっちゃんと言っんなら、付き合ってみようかな」

言っつてよ、今からでも遅くないから。

「明日から大変だなあ、剣道部のみんなに冷やかされちゃうよ」
「たっちゃん、お願い。」

「一音と右太にも言わないとね、帰ったら電話しよっつと」

なのに莉子と見渡の

話を聞いて、彼はその場の嘘をついてしまった。

別れ際の莉子の悲しそうな瞳が頭から離れず、どうにもできない
もどかしさを抱えてい
く。

第5話（後書き）

今作は全6話ということで、次回が最終話となります。

第6話

綿雲が一つ一つと空に流れていく、なんだか手を伸ばせばパツとつかめそうにも思えた。

高校は2学期に入り、平尾匠には憂鬱といえる日々が戻ってくる。勉強はよく分かな

いし、学校生活にもこれといえる手応えもない。

なによりも、大きく変わったのは心を寄り添わせることのできる仲間との距離だった。

「おいさん、今日も遅刻したって?」

「なんで知ってたんだよ」

「一音から聞いた、すげえ嫌そうに言ってたよ」

「ああ、怒られてるときに目が合ったし」

授業の時間だったが、この日は右太に誘われて屋上に来ていた。

誰もいない貸切の屋上

は変に静かで、砂利やごみも転がってるのに優雅な気分さえなれた。2人で真ん中に寝

転がると、上を流れていく健やかな空の景色に見とれながら会話を続けていく。

「まったく、おいさんは莉子がケツたたかないと起きれもしないのか?」

「バカやろう、そんなんじゃねえよ」

「じゃあ、莉子に起こしてもらえないのは淋しい?」

「せえせえだよ、ぐっすり眠れることったらないね」

「……強がりだな、ホント」

強がらせたら学校でこいつの右に出るやつはいないだろうな、そう右太は匠の不器用さ

にククツと笑う。

あの日、匠と莉子の間に溝が出来てから、2人の毎朝の間接決闘はなくなった。莉子は

自宅から学校までの道のりを外れることなく通い、匠は当然のように遅刻続きの毎日を送

ることとなる。彼女からの手紙もなくなった、毎夜のように玄関ポストを確認してもピンの

クの封筒は見当たらなかった。

一音も同じように匠と距離を置いた、あれだけ見られた2人の言い合いもすっかり影を潜めている。

右太だけは彼から離れなかった、ただ彼だって匠に持っていた期待をなくしている。

「なあ、どうしてか聞いてもいいかい？」

「んっ？」

「おいさん、なんで莉子じゃダメなんだよ」

しばし言葉はなく、匠が口を開く。

「……俺じゃない方がいいだろ、あいつには」

「どういうことだよ」

「俺よりも剣道部の主将の方がいいはずだろ。勉強だって、見てくれだって、性格だって、

運動神経だって、大体は向こうが勝ってるんだし」

心が痛む、それぞれの言葉の角を尖らせて自分に刺してるような感覚で。

「それが理由か？」

「それだけじゃねえけど、要は俺だと不十分ってことだよ。あいつみたいに何でも無難に

こなせる器用なやつに、俺みたいな何もやれない劣等なやつじゃ似合わないんだよ」

匠の素直な気持ちだった、彼は莉子といると時々そう感じてしま

う。莉子がそつなく物事をやってしまう様を目にすると、引け目を感じる。剣道は正にそれだった、彼女の美しいほどの剣さばきを目の当たりにして。全国大会に進出するような逸材の彼女に対し、何も無い毎日を同じように過ごす自分に気後れが生じるのは自然といえた。

自分と莉子じゃ吊り合わない、そう彼は決断した。今まではなんとなく自分の中に隠してきた思いが、彼女の剣道の試合を見たことや見渡のような男が出てきたことで確実なものになった。

だから匠は莉子に別れを告げるような真似をした、本当の想いを内に込めたまま。

「それって違うくないか？」

「なにが？」

「おいさんの中で、おいさんと剣道部の主将がどうこうってことは重要な？」

「……まあ」

「莉子の中で、おいさんと剣道部の主将のどっちがってことじゃダメかい？ 莉子がおいさんを選ぶんなら、それで莉子は幸せなんじゃないのか？ そんなで莉子が幸せになることで、おいさんも幸せにはなれないのかな？」

「また言葉のない時間になる、匠は思い巡らす。」

「……さあ、どうだろうな」

結論は出なかった、答えはいたってシンプルで果てしなく遠くに思えた。

「昨日ね、チョコレートプリンに挑戦したの」

「へえ、成功したの？」

「初めてにしては合格点あげられるかな、って感じ」

「すごいじゃん、右太には食べさせたの？」

「朝渡してね、さつきメールで「美味かったよ」って来たんだ」

「ほお、やるなあ一音ちゃん」

莉子がそう褒めると、一音は素直に照れる。

一音と右太はなんだかんだで着実に関係を進ませていた。一音も彼の前ではありのまま

を出せたし、右太も彼女の気持ちに応えようとしていた。この2人は放っておいても大丈夫

夫、そう安心できるぐらいになっていた。

「でっ、私の分は？」

「あっ、初めてだったから失敗の可能性も考えて2人分しか作ってない」

「えっっ、さんざ聞かせといて食べれないの？」

「ごめんごめん、そのうちに作ってくるから」

プーツと意図的に頬をふくらます莉子の頭をそっと一音が撫でてあげる。

莉子をなだめるように何気ない会話を続けていると、呟くように彼女から言葉が出た。

「……ねえ、たちちゃんってどうしてる？」

「まただ、そう思ってた一音は息をつく。」

あの日以来、莉子は定期的にこの質問をしてくる。もう、「そんなに気になるんなら、直接本人のところに行ってくればいいじゃん」と言ってやりたいくらいに。

「相変わらずの遅刻さんまいだよ、今日なんか職員室に呼び出されて説教つけてたみたいだし」

「……そう」

これまでなら笑って話してたことなのに、莉子は淋しそうな瞳をしていた。目の前で話している一音ではなく、どこか遠くの方に視界は向いている。そこに誰を映してるのかは言わずとも分かる、本当はまだ好きだということも。

「おはよう、平尾くん」

「ああ、おはよう」

暑さもだんだん和らいできた季節の変わり目、夏の終わりと秋のはじまり。

週末の昼間、匠は間村小鳥と待ち合わせた駅前にいた。

「なんか、今日はいつもと違うね」

「うん、ちよつと頑張っちゃった」

間村はボーダーのワンピースにスキニーパンツという、言い方は悪いが彼女らしくない

衣装だった。彼女はメガネを掛けている印象通りの真面目な子で、

制服のスカートの丈だ

って一切いじってはいない。そんな子がファッション雑誌の特集に載ってそうな衣装を着

てるのは違和感も生じる。きっと今日のために買ってきてくれたんだろう、それだけでグ

ツと揺れるものがあつた。

「でも、平尾くんはいつもと同じだね」

「ああ、俺こんなのしか持ってないんだよ。別に、洋服に執着してないし」

匠は詳細の分からないようなロゴの入ったジャンパーにジーンズという、実に彼らしい

衣装だった。もう何度かしているデートでも、彼の衣装には目立った変化は見られない。

「ねえ、手つないでいい?」

「んっ、ああ」

間村の促しで彼女の要望に気づくと、匠はジャンパーのポケットに入れていた右手を取り出して彼女の左手を握る。

せつかくのデートだというのに、匠はどこ吹く風でいることが多い。それは間村にも伝わっていた、隣にいるのに彼のことが掴めないことはしょっちゅうだ。匠自身が掴みどころのない性格ではあるけれど、彼女である自分の前でそうされるのは胸が痛む。

2人は映画を見て、ファミレスで食事をすると雑談を重ねる。ただ、ここでも匠はいくら時間が経つと、ボーッと窓の外を眺めていた。

「平尾くん、楽しくない?」

「んっ?」

「私と一緒にいると楽しくない?」

さつきまでの会話のときの間村の笑顔が消えていた。

「何言ってるの、めっちゃ楽しいよ」

「本当に?」

「本当だって、なに疑ってるのさ」

「そう、ならよかった」

そう間村は微笑む、合わせるように匠も同じ顔をした。

「たまに不安になるの、もしかしたら平尾くんは私のこと好きでもなんでもないんじゃないかな」

「なに、どういうこと?」

「ホントは私なんかどうとも思っていないのに、わざわざ付き合ってくれてるんじゃないか」

って」

「そんなわけないでしょ、それなら一緒になんかいないって自分の心底を見透かされたようで、匠は大きく否定する。」

「平尾くん、学校でもあんまり話したりしてくれないし」

思い当たる節はあった、学校の休憩時間は基本的に男友達とつるんでいたから。それは

無意識だったとしても、間村からすれば当然学校でだって一緒にいたい。無意識だからの

罪かもしれない、それは意識をしないと間村のことを気につけられないともいえたから。

「ごめん、これからは話すようにするよ」

「いいよ、案外それはそれでよかったですから」

「んっ？」

言葉の意味がつかめなかった、蔑ろにされることを自ら選ぶなんて普通じゃない。

「傍から平尾くんが友達と喋ってるのを眺めてるのも結構好きなんだ。付き合う前は、ず

っとその状態だったし。ほら、片想いつて実はすっごく楽しかったりするじゃん？ その

ときの感覚に戻れて、それはそれでいいかなあって思っちゃうの」

「ふうん、そうなんだ」

「それに、他の女の子と喋ったりしないから安心できるし」

「・・・なるほど」

片想いが楽しいという言葉は納得できるところもあり、納得できないところもあった。

確かに同意はできるけれど、それがどれだけ苦しいものかも匠には分かっていたから。

「でも、前はちよつとだけ不安なところもあったの」

「んっ、何が？」

「平尾くん、待井さんとはよく喋ってたでしょ。だから特別な人な

のかなあ、って思ってた

「はっ？ そんなの、ありえないでしょ」

「うん、それが分かって安心できたの」

「あんなのと付き合ったら、体がいくつあっても足りないって」

間村はフフツツと笑顔を見せる。

「そういえば、最近あんまり待井さんと喋ってないね」

「ああ、なんか俺のことが嫌いみたい」

「そうなの？」

「そう、っていうか元からなんだけどね」

「ケンカしたとか？」

「まあ、近いかな」

「それは仲直りしなくていいの？」

匠は言葉なしにうなずく。

「ふうん」

仲直りをしたくないわけじゃないが、ここでそうとは言えなかった。彼女との仲直りには、自動的に莉子との関係の修復も付属されると思うから。

莉子と元通りになるということは、間村と一緒ににはいられない。つまり、一音と仲直り

するためには間村との関係を切ることと近似する。だから、間村の前で一音と仲直りした
いとは言えなかった。

「おはよう、北野さん」

「おはようございます、先輩」

季節はすっかり秋色に染まっていた、街行く学生たちもブレザーを着るのに慣れてきた頃合。

莉子は待ち合わせ場所の映画館の前にいた、そこに見渡が定刻通りにやってくる。

「今日はかわいいね」

「えへへ、ありがとうございます」

莉子はニットカーディガンとシャツとロングスカートという、学生服とは違う洗練した

印象の衣装でいた。

「じゃあ、中に入ろうか」

「はい」

2人は映画を見て、食事をとり、買物を楽しんだ。関係は順調といえた、周囲も羨むよ
うな2人と見立てられて。

同時にただ1つ、どうしても進められない壁があった。

「………すいません」

その言葉で、近づいていた2人の顔が離れる。

「ごめんなさい、そういうの大事にしたいんです」

自責の念に駆られ、申し訳なく言う。

「ああ……ごめん」

行動を早まったと思い、思わず見渡は謝る。

2人の中にある壁は、莉子が一歩的に築いてしまったものだった。見渡が唇を合わせよ

うとすると、莉子は顔をそむけた。恋人関係になって2〜3ヶ月になる、見渡がキスしよ

うとするのは何もおかしなことではない。

なのに、どうしても莉子は受け入れられなかった。抱きしめられてるときでさえ、匠に

対する自分の想いに心苦しさが生まれてくるぐらいに。

匠だって同じだった、彼も間村に対してキス以上の関係になることはなかった。

ただ、それにも限界は近づいてくる。季節は冬を迎えようとして

いた、全ての決断が
要とされる大きな冬だった。

珍しい時間にインターホンが鳴る、時刻は20時を越えたばかりだった。

「ごめん、ちよつといい？」

「ああ、いいけど」

玄関扉を開くと莉子の姿があった、予期しない展開に匠に動揺が生じる。部活帰りの制

服姿の莉子、夕食の準備中で部屋着の匠。

「……なんか、久しぶりだね」

溢れるように出た一言に、莉子は笑みを浮かべる。

「ああ……まあ」

こうやって面と向かって話すのはあの日以来、4〜5ヶ月ぶりになるだろうか。だから

こそ余計に気になった、どんな用で莉子はここに来たのだろうか。

「最近さ、あんまこうやって喋ることなかったよね」

「ああ」

一音が4組に、右太が2組に来ることはあるが、2人が行くことはなかった。一音と右

太が意図的に顔を合わせなくてもいいようにしていたのは分かっていたが。

「廊下ですれ違ったりしても目が合うだけで、なんか変に他人行儀だったりしてさ」

「ああ」

それでも、お互いのことは誰より気にかけていた。莉子は一音からそれとなく近況を聞

き出し、匠には右太の方が気をつかって話してくれていた。

「……寒いね、大丈夫？」

本題に行きづらく、クッションをはさむ。

「ああ、そつちは部活帰り？」

「うん、今度また練習試合があるの」

「へえ、そういえば部長になったんでしょ？」

「うん、なんか嫌だったんだけど周りに推されちゃって」

「そりゃそうだろ、全国大会に行くようなのがいんのに他のやつを推すかよ」

「まあ、すぐ負けちゃうような子だけど」

そう笑みをこぼすと、匠も不器用な笑みを見せた。

8月に行われた剣道の全国大会、莉子は1回戦で2本先取されてあっさり敗れた。相手も全国区の選手だから、そう思えば簡単だが彼女には割り切れなかった。匠との関係が離

れて、見渡との交際を始めたときだったからこそ、結果が欲しかったのに。匠が応援にいらなくても、見渡が側で見てくれたら県大会と同じように力が出るという証明のため。

だけど無理だった、相手の強さというよりも自分自身が原因だったことは本人がよく分かった。匠が見てくれていると意気込んだ県大会のときのような湧き上がるものが出なかつ

たから。自分の中にある匠への想いを断ち切る機会だったのに、逆に彼がいてくれないと

自分が出せないことを思い知らされることになってしまった。

それからというもの、莉子の中から匠が消えることはなかった。自分に目をそむけるよ

うに見渡とデートを重ねてきたが、もう限界だった。

「たっちゃん、間村さんとはうまくいってる？」

「まあ・・・まあまあね」

莉子は内心ホツとする、ここで決定的な言葉が出ていたら萎縮し

てしまったかもしれないから。

「そつちこそ、どうなんだよ」

「うん、まあまあ」

匠の言葉を使わせてもらった、莉子は徐々に鼓動が早まっっていくのを感じた。

「オジさん、いるの？」

「ああ、今日は帰って来てる」

中から物音が聞こえたので、莉子にはそれが分かった。

「そうか、たまにはオジさんにも会ってみたいな」

「じゃ、呼んでくる？」

「ううん、また今度でいい」

3人になって、話が変わる方についても困る。

今日は言わなければならないことがある、今日じゃないといけな
いことが。

「オジさんには、いろいろ教えてもらったよね。小さい頃は3人で
川原とか行ってザリガ

二とかカエルとか捕ったり、森とか行ってカブトムシやクワガタと
か捕ったりしたもんね」

「ああ、懐かしいな」

10年も前の話だ、でも今でも鮮明に思い出すことができる。2
人で毎日のように遊ん

で、意味もなく走り回ってた。何もなくても楽しかった、2人でい
られれば。

「オバさんがいなくなってから、ちょっと遠くなっちゃったよね」

「ああ・・・まあ、あのときはオヤジも落ち込んでたから」

匠の母親は彼が中学生のときに事故に遭った。そのときに命は落
とさなかったが、結果

そのときの傷によって数日後に亡くなった。

それまでは匠と莉子を通して家族ぐるみの仲だったのに、それからはどことなく距離が置かれてしまった。匠の掴みどころのない性格も拍車がかかって、莉子とも少なからずの距離が開いた。

ただ彼女はそのままにできなかった、彼との関係が薄まってしまふのは嫌だった。

それから匠に遅刻が増えたことをきっかけにした、口実は何でもよかったから。いなくなつた母親の代わりに莉子が毎朝匠を起こしに行くことになつたのは、その次の日からだった。

「たっちゃんも偉いよね、あれからちゃんと家事をやってるんだから」

「まあ・・・誰かやんないといけないし」

母親が亡くなってから、平尾家の家事は匠がこなしてきた。父親はトラックで運送業をしていたため、週の5〜6日は夜から深夜までが仕事だったから。夕方に出掛けて深夜まで仕事をこなし、朝方まで仕事仲間と飲んで匠が学校へ出掛けた後に家に帰ってきて夕方まで寝るといふ毎日だ。

中学生の匠はゼロからスタートした家事に毎日追われながら過ごしてきた。部活をやることもなく、放課後に仲間と街に繰り出すことも滅多にない。両親のいない一軒家で1人過ごす日がほとんどだった、近くにいた莉子にはそんな彼の様子は分かった。周りの人間には匠はやる気のないように映るだろう、本当は感情が足りてないだけなのに。多感な青

春の時期にもらえる多くの感情が与えられず、他よりも不器用に形
成されてしまっただけ
なのに。

だから、彼のことを分かってあげられる自分が側にいてあげたい。
何度も突っぱねられ

てるけど、それが本心じゃないと信じたい。

「そつえばさ、あのときの約束って覚えてる？」

「約束？」

匠は憶えてないようだ、そんなことぐらいは分かってたけど。

「私のことをお嫁さんにしてくれる、って言ったじゃん」

思いもよらない言葉に匠は驚く、目の前の莉子には悟られないよ
うに内に隠したが。

「そんなこと言ったっけ？」

「言ったじゃんか、幼稚園の年長のときに。 たっちゃんのお嫁さん
になりたいって言った

ら、いいよって言うてくれたでしょ」

匠は当時を思い返してみるが、漠然とした景色しか浮かばない。

「記憶にないんだけど」

「そつちにはなくても、こつちにはあるのー！」

少し強めに言った、彼に怒ってるんじゃないかって自分を奮い立たせ
るために。

「っていうかそんなの時効でしょ、お互い恋人がいるんだし」

「……. そんなことないよ」

はぐらかそうとした匠の瞳に映ったのは、切なさに瞳を潤ませて
いる莉子だった。

彼女は少しずつ彼に近づいていき、20cmほどの距離で止まる。

匠は急に襲ってきた

緊張にやられ、莉子は高鳴る鼓動をおさえられなかった。すぐそこ
に恋先の顔があった、

愛しくさが込み上げてたまらなくなる。

「・・・好きだよ・・・たっちゃん・・・」

不意に莉子の顔に母親がだぶった、そこに無償の愛情を感じられた。

「・・・大好き・・・」

言葉の後で莉子の瞳から涙が一つ流れると、匠は莉子の体を抱き寄せた。そこにはい

ない感情は何もなく、ただ反射的に体がそうしていた。

お互いの背中に腕を回し、莉子はそこで泣き続ける。優しくった、恋先の体も、腕を回

した背中も、背中に回されてる腕も、顔を添えた肩も、顔に少し触れる髪も、なにもかも。

そのまま同化してしまいそうなくらい、自分の体は恋先とぴったり合った。

「・・・たっちゃんは？・・・」

「んっ？」

「・・・私のこと、好き？・・・」

こうしてるんだから分かるだろ、その浮かんできた言葉は口にしなかった。

「好きだよ」

匠の言葉が体中に伝わる、どんな病気でちやっつけてしまいそうな大きな力に思えた。

「・・・聞こえないよ・・・」

「嘘をつけ」

「・・・じゃあ・・・もう一度言って・・・」

「もう言わねえよ」

「・・・お願い・・・」

「ぜってえ言わねえ」

「・・・たっちゃんの意地悪・・・」

「どっちがだ」

そう言い合うと、2人でフツツと相手の肩で笑った。

そのまま、3分は抱き合っただろうか。体を離すと、お互いに見合って訳も分からずに笑った。

「たっちゃん」

「んっ？」

「もう1回、聞いてもいいですか？」

「何が？」

また好きかどうかを聞かれると思い、匠ははぐらかす。

「私をたっちゃんのお嫁さんにしてくれませんか？」

匠の予想は外れた、答えはもつと言いくらいのものだった。

「それ、前に言ったんでしょ」

「だって、さつき幼稚園のは時効だって言ったじゃん」

しまった、余計なこと言うんじゃないかった。

「ねえ、たっちゃん」

「……いいよ」

莉子は喜色をおさえきれずにハニかんだ。

限界点をとくに超えてる嬉しさに押されるように、莉子は匠にキスをした。唇を合わ

せるだけのキス、それで心臓はどうにかなりそうになった。彼からしてくれるのを待とう

としたけど、きつと夜が明けてしまうだろう。

2人の気持ちは通じ合えた、時間は掛かってしまったけれど。

翌日のクリスマスイヴ、匠は間村小鳥と、莉子は見渡当真と会った。もちろんデートを

するためじゃなく、自分の本当の気持ちを告げるために。

別れを告げると、間村も見渡も驚きの表情を見せたが執着はしなかった。間村も見渡も、

匠や莉子が自分に気持ちを寄せていないだろうことは感じていたから。

本当にタイムアップのギリギリだった、もう1日もないところだった。

一昨日の夜に一音からの電話がなかったら、莉子はきっと迷ったまま答えを出せずに今日を迎えていたことだろう。

「イヴ、見渡先輩と約束してる？」

「うん、まあ」

悩んだが、一音はあの無性に腹の立つ男の加勢をすることに決めた。あんなやつのため

に動くのは気に障るけど、これ以上2人がダメになるのはもっと嫌だから。

「あんた、それでいいの？」

「……それでいい、って？」

「ごまかさないの、匠のことよ」

それを言われると、莉子は黙ってしまった。

「あんたが先輩を選ぶんらいいけど、匠がいんなら今しかないんだよ」

「今しかない、って？」

「あんた、先輩に何も許してないんでしょ。明後日はイブなんだから、もうそういうわけ

にはいかないんだからね」

一音の意見は尤もだった、さすがにイヴの日に断ることは無理だろう。今まで4〜5ヶ

月も何もさせなかったんだから、向こうだってイヴの日こそはと思ってるはずだ。残され

たイヴの前日に、莉子は匠への想いに決着をつけなければならなかった。

匠も右太から同じような電話をもらっていた、彼も莉子と立場は

同じだった。時間いっぱい
で2人は気持ちを合わせる事が出来た、一音や右太も「手間
取らせて」と言いつつ
喜んでくれた。

その喜びは1日ともたなかった。

匠は高校の校門に自転車を並び置き、莉子の来るのを座って待っ
ていた。お互いの用件

が済んだら、一緒にどこかに行こうとここで待ち合わせていた。

「たっちゃん、終わったから今から行くね」

30分前に彼女から届いたメール、もうすぐ彼女も着く頃だろ
うか。

吹きつける寒風に身を揺らせてると、携帯も揺れた。なんとなく
着信の相手は分かった

が、やはり莉子からだった。もうそろそろという電話だろうか、匠
は出る。

「もしもし」

「・・・たっ・・・ちゃん・・・」

すぐに彼女の異変に気づいた、不安定な声をしている。

「どうかした？」

「・・・よく・・・分かんない・・・」

ヒーファーと荒い鼻息が聞こえる、呼吸がおかしかった。

「どうした？ 何があった？」

「・・・なんか・・・いつぱい・・・人が見てる・・・」

電話口の声が細くかすれてく、「うう」とか「うん」とか辛うじ
て聞き取れるような小さ

な声もいくつか発している。彼女になにか起こったのは明白だった、
匠は立ち上がって声
を強くする。

「今どこにいる？　すぐに行くから！」

「・・・ぼやけてて・・・よく見えない・・・」

視界もやられていて、只事じゃない。

匠は自転車に飛び乗り、どこかも分からない目的地へ全力でペダルを漕ぎ出す。

「他の人に変われるか？　人いっぱいいるんだろ？」

変わった人間から場所を聞き出せば、目的地は分かる。

「・・・たっ・・・ちゃん・・・」

「喋らなくていい！　他の人に変わってくれ！」

匠の言葉が聞こえないように、莉子は先を続ける。

「・・・ごめんね・・・」

「無理して喋んな！　今から行くから！」

「・・・たっ・・・ちゃん・・・」

そう匠を呼ぶ声はどんどん芯がなくなっていく。

「・・・好き・・・だよ・・・」

嬉しいはずの言葉が痛々しかった。

「・・・たっ・・・ちゃん・・・は？・・・」

「ああ、好きだよ、好きだ！」

だから、そんな無くなりそうな声を出さないでくれ。

「・・・あり・・・がとう・・・」

匠の自転車はこれでもかというスピードで走っていく。彼女が見渡と会っていた場所か

ら高校までのどこかにいるはずだ、そう信じて。

「・・・だい・・・すき・・・」

莉子の言葉はそこで途絶えた、匠がどんなに叫んでも応えはなかった。電話口からざわ

ざわと人の声がある、彼女の言っていた周りにいる人間のものだろう。そのまま通話状態

を続けていると、やがてサイレンの音が大きくなってくる。救急隊員と思われる人たちの

やり取りが聞こえる、彼女は救急車に乗せられて運ばれていく。救急隊員の懸命な対応を

ただ聞くことしかできず、匠は街中で呆然と電話を耳にあてていた。10分ほどで大きい声が止んだ、電話口ではピーツと聞き覚えのある一定音がしている。

自転車はその場に音を立てて倒れ、匠は頭を抱えてしゃがみこんだ。初めて味わう感情に覆われて、とめどない虚無感に発狂するぐらい泣き叫んだ。孤独をからませて吹く寒風なんて、気にも留めることができなかった。

匠が病院を訪れたのは数時間後だった、空はオレンジになっていく。ただ座り込んでいただけの時間は無でしかなかった、莉子との思い出を思い起こすこともできず。

その間、莉子の母親、一音、右太の順で携帯に着信が入っていた。重い腰を上げたのはいいが、病院に行くのが怖かった。莉子に会ったら、現実を受け入れなければならぬ。

それでも行かないとならない、このまま逃げるわけにもいかない。今日会おうと約束したんだ、ちゃんと守らないと莉子も怒るだろう。

「・・・匠・・・」

病院に行くのと霊安室に通された、扉を開けると一音と右太がいた。莉子の家族は、もう通夜の準備のために後にしたところらしい。

一音も右太もこちらを見ても何を言うことはしなかった。今自分はどんな顔をしてるだろう、きつと時化した面なんだろうな。

そう思いながら莉子のところまで歩いた、息をついて彼女の姿を見る。これといった印

象のない表情、顔は死化粧で白みを帯びていた。そんな彼女の姿を、無表情にただ見ることしか出来なかった。

「匠、これ」

後ろから突かれて、右太から渡されたのは見覚えのあるピンクの封筒だった。

「莉子のバッグに入ってたって、あいつのオバさんから渡しておいてくれて頼まれて」

そう言つと、一音と右太は気をつかつて霊安室から出ていった。

モンチツチのプリントされた薔薇色の便箋に松葉色の文字、クリスマスを意識しての色

使いなのはすぐに分かった。莉子からの最後のLOVE LETT
ER、目を通していく

と涙があふれてきた。温かい手紙だった、冷えた匠の体と心を和らげてくれるには充分に。

それなのに、莉子のささやかな願いは叶えられなかった。

なんで、こんなに分かり合えるまでに時間が掛かってしまったんだろう。もっと早く、

自分が素直になれていれば彼女のこんな姿を見なくてすんだはずなのに。後悔は次から次

へ押し寄せて、返ることもなく匠の中に留まっていた。

「たっちゃん、メリークリスマス。」

今日はなんだかドキドキしてるよ、楽しいデートにしようね。

たくさん話して、いろんなところ行って、手をつないで・・・後
はなりゆきで。

今まで素っ気なくされてきた分、たっぶり甘えてやるんだから。

言っときますが、たっちゃんに拒否権はないのでよろしく。

そつだ、プレゼントだけど一緒に選ぼうかなと思ってます。
どうせ、たっちゃんは事前に用意してくるなんてことしないだろ
うし。

2人で一緒のものがいいな、ちなみにこれも拒否権はないのでよ
ろしく。

まあなんにしても、これからは2人で幸せになろうねっていうの
が私の1番の願いです。

たっちゃんとなら、きつと出来るはずだから。

私のことを幸せにしてね、私も幸せにしてあげるから。」

匠は莉子にキスした、冷たくて切なくて淋しい唇が合わさった。

第6話（後書き）

今作の本編は今回で終了となります。
次回のエピソードでラストとなります。

エピソード

北野莉子の通夜でも葬式でも、平尾匠は涙を流すことはなかった。やりきれない感情を

どうしていいか、まだ分からずじまいで。

きつと、この先も発散させることはできないのだろう。彼女のささやかな願いを叶えて

あげることが出来なかった、その報いかもしれない。

「そんなことないよ、絶対」

一音からの言葉だった。

「一昨日、莉子からあんたと付き合うことになったって電話もらったの。そんなとき、あの子がどれだけ幸せそうだったか。明日のデートどうしようって、見たことないぐらい動揺してたもん。あんたと通じ合えたの、本当に嬉しかったんだよ。そりゃ、これから幸せになることはできないけれど、幸せになれて逝けたんだからいいんじゃない」

その言葉は救いだった、そう思えることができれば救われる。

「気を落とさなさんな、おいさんはこれからあるんだから」

そうだ、自分にはまだ先の人生がある。ただ、今それを考えるには気持ちに余裕がなさすぎた。

「匠くん、莉子のことはいろいろありがとう」

「いえ、そんな」

何を考えることもなく下を向いていると、莉子の母親からそう言われた。これ、と母親

から渡されたのは、なんでもない画用紙の切れ端だった。昨夜、莉子の部屋の物を見ているときに見つけたものらしく、画用紙の前後に書かれていたものから彼女が幼稚園の頃に書いたものだった。

莉子の部屋に上がり、彼女のベッドに腰を下ろすと部屋にあったCDデッキの再生を押した。Mr. Childrenのベスト盤だった、清涼な音が聞こえ出すと匠は画用紙の切れ端に目を通していく。雑な文字だったけど、当時のことが思い出されて懐かしい気分になった。

「たっちゃん、こんばんは。

きょー、うれしいことがありました。

たっちゃんのおよめさんになりたいっていったら、たっちゃんがいいよっていつてくれたの。

ワイって、ピョンピョンとびはねたいぐらいだったよ。

やったっ、これであたしはたっちゃんのおよめさん！

そんで、たっちゃんはあたしのだんなさん！

おててつないで、ごはんたべて、おふるはいつて、ちゅーして、べっどでねようね。

おとーさんとおかーさんがやってるから、あたしたちもやるうね。ずっとずっといっしょにしようね、ぴったりくっついてようね！あたしのだいすきなたっちゃんへ、チュッ！」

幼稚園のときに匠が莉子のプロポーズをOKした日に書いたものなのだろう。匠に記憶

がないということは、きつと恥ずかしかったとかで渡しそびれたも

のだろうか。

莉子からの最初のLOVE LETTERは12年越しに匠のもとへ届いた。

エピローグ（後書き）

本作は今回で最終話となります。

読んでくださって、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6209e/>

LOVE LETTER

2011年4月13日08時35分発行